

# 塩生遺跡 西元浜貝塚

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第19集

倉敷埋蔵文化財センター

2023.3

# 序

岡山県南部に位置し、瀬戸内海に面する倉敷市には旧石器時代から中近世までの各時代の遺跡が残されています。市の南東部にあたる児島は、その名のとおり瀬戸内海沖に浮かぶ孤島であった時代があり、児島の海岸線では古くから塩の生産が盛んに行われました。塩といえば米、鉄とともに重要な産物で、奈良時代には児島郡から平城京に塩を上納していたことが明らかとなっています。また、縄文時代までさかのぼると、海に面した丘や小高い浜辺では魚貝類などを糧とした人々の生活が営まれました。その痕跡は貝塚として市内の各地に残されていて、この地域は西日本でも有数の縄文貝塚の密集地として知られています。

本報告書には、児島の西岸に立地する塩生遺跡と、倉敷市西端に位置する玉島黒崎にある西元浜貝塚の発掘調査の成果を取録しました。

塩生遺跡では、集合住宅建設に伴う事前の確認調査および工場建設工事に伴う発掘調査を行いました。地下に埋もれた砂浜から古墳時代の製塩土器を中心とした遺物が出土し、中世の製塩遺構、土壙墓も見つかりました。中世の製塩遺構は当時の製塩業を伝える重要な資料です。また、土壙墓からは保存状態の良い埋葬人骨が出土しており、人類学を研究するうえでも貴重な資料を得ることができました。

西元浜貝塚では、限られた範囲の調査であったため貝塚は発見されませんでした。石器を中心とした遺物が出土しました。

本書が、倉敷市における文化財の保護・保存に活用されるとともに、多くの方々が当地域の歴史を学ぶうえで役立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の現地指導をはじめ、報告書の作成にあたりまして、ご支援ご協力を賜りました関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

令和5年3月31日

倉敷市教育委員会  
教育長 井上正義

# 例 言

1 本書は、平成5年度および令和2年度に実施した塩生遺跡の確認調査と発掘調査、ならびに昭和63年度および平成2年度に実施した西元浜貝塚の確認調査と発掘調査の報告書である。

2 各遺跡の調査内容は以下のとおりである。

## 【塩生遺跡】

- ◎所在地 倉敷市児島塩生字濱1919番外
- ◎調査期間 平成5年6月22日～7月21日・平成6年1月20日
- ◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター学芸員 福本 明 同学芸員 小野雅明  
同学芸員 中野倫太郎 同学芸員 片岡弘至
- ◎調査期間 令和2年8月4日～8月25日
- ◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター主幹 小野雅明 同主任 藤原好二

## 【西元浜貝塚】

- ◎所在地 倉敷市玉島黒崎字氏内101番外
- ◎調査期間 昭和63年11月28日～12月10日
- ◎担当者 倉敷市教育委員会文化課学芸員 福本 明 同学芸員 鍵谷守秀  
同学芸員 小野雅明
- ◎調査期間 平成2年6月1日～6月22日
- ◎担当者 倉敷市教育委員会文化課学芸員 小野雅明 同学芸員 谷岡孝久  
(職名等はいずれも調査当時)

3 本書の執筆は、小野と藤原が担当し、各章第4節については文末に文責を記した。全体の編集は藤原が行った。また、報告書の作成にあたっては倉敷埋蔵文化財センター嘱託員 内田智美、那須玲子、日下美樹の協力を得た。

4 発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は鍵谷が行った。

5 本書第1章の挿図に使用した高度値は海拔高であり、第2章の挿図に使用した高度値は仮水準点からの値である。方位はいずれも磁北である。

6 本書第2・45図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。

7 本書に関係する出土遺物、実測図、写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

# 目次

## 序

<b>第1章 塩生遺跡</b> .....	1
第1節 位置と環境 .....	1
第2節 調査に至る経緯と経過 .....	3
1 平成5年度の調査 .....	3
2 令和2年度の調査 .....	5
第3節 調査の概要 .....	7
1 平成5年度の調査概要 .....	7
2 令和2年度の調査概要 .....	12
3 遺物 .....	18
第4節 まとめにかえて .....	31
1 中世の製塩遺構について .....	31
2 鈿帯 .....	33
3 土壙墓2とその遺物 .....	35
出土遺物観察表 .....	40
<b>第2章 西元浜貝塚</b> .....	47
第1節 位置と環境 .....	47
第2節 調査に至る経緯と経過 .....	50
第3節 調査の概要 .....	51
1 確認調査の概要 .....	51
2 平成2年度の調査概要 .....	55
3 遺物 .....	58
第4節 まとめにかえて .....	60
出土遺物観察表 .....	63
<b>付編 塩生遺跡における放射性炭素年代（AMS測定） および炭素・窒素安定同位体分析</b> .....	65

# 挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第29図	製塩土器6	23
第2図	周辺の遺跡	2	第30図	製塩土器7	24
第3図	平成5年度トレンチ配置図	4	第31図	製塩土器8	25
第4図	令和2年度調査区配置図	5	第32図	製塩土器9	26
第5図	調査地位置図	7	第33図	須恵器	27
第6図	トレンチ1北壁断面図	8	第34図	土師器	28
第7図	トレンチ2 南壁断面図・遺構平面図	8	第35図	中世土器	28
第8図	トレンチ3東壁・南壁断面図	9	第36図	土 錘	29
第9図	トレンチ4断面図・遺構平面図	9	第37図	金属製品	30
第10図	土坑2出土鉄器	10	第38図	その他の遺物	30
第11図	トレンチ5南壁断面図	10	第39図	塩生遺跡遺構配置図(左)と 推定位置図(右)	32
第12図	トレンチ6遺構平面図・断面図	11	第40図	旧児島高等学校歴史研究部 による塩生遺跡の調査	33
第13図	トレンチ7西壁・北壁断面図	11	第41図	肥後国のイソガネ	36
第14図	1区北壁・東壁断面図	13	第42図	徳島県のイソガネ	36
第15図	1区遺構配置図	14	第43図	遺跡の位置	47
第16図	土壌幕1平面図・断面図	14	第44図	西元浜採集尖頭器	48
第17図	土壌幕2集石検出状況	15	第45図	周辺の遺跡	49
第18図	土壌幕2平面図・断面図	15	第46図	確認調査トレンチ配置図	52
第19図	土壌幕2出土遺物	15	第47図	トレンチ断面図1	53
第20図	炉状遺構3平面図・断面図	16	第48図	トレンチ断面図2	54
第21図	土坑3平面図・断面図	16	第49図	調査区配置図	55
第22図	2区断面図	17	第50図	2～4区断面図	56
第23図	2区遺構配置図	18	第51図	5区西壁断面図	57
第24図	縄文土器・弥生土器・ 製塩土器1	18	第52図	縄文土器	58
第25図	製塩土器2	19	第53図	石器1	58
第26図	製塩土器3	20	第54図	石器2	59
第27図	製塩土器4	21	第55図	装身具	60
第28図	製塩土器5	22	第56図	遺跡の範囲	61

# 図版目次

- 図版 1 塩生遺跡 平成5年度(1)
- 1 トレンチ1北壁断面
  - 2 トレンチ2土坑1検出状況
  - 3 トレンチ3東壁断面
- 図版 2 塩生遺跡 平成5年度(2)
- 1 トレンチ4土坑2断面
  - 2 トレンチ4土坑2検出状況
  - 3 トレンチ4土坑2鉄釘出土状況
- 図版 3 塩生遺跡 平成5年度(3)
- 1 トレンチ5南壁断面
  - 2 トレンチ6炉状遺構1検出状況
  - 3 トレンチ7炉状遺構2検出状況
- 図版 4 塩生遺跡 令和2年度(1)
- 1 1区全景(南西から)
  - 2 1区北壁断面西半
  - 3 1区東壁断面
- 図版 5 塩生遺跡 令和2年度(2)
- 1 1区炉状遺構3検出状況
  - 2 1区土坑3半截状況(南西から)
  - 3 1区土壌墓1(南から)
- 図版 6 塩生遺跡 令和2年度(3)
- 1 1区土壌墓2(北西から)
  - 2 2区全景(南西から)
  - 3 2区西壁断面
- 図版 7 塩生遺跡 出土遺物(1)
- 図版 8 塩生遺跡 出土遺物(2)
- 図版 9 塩生遺跡 出土遺物(3)
- 図版 10 塩生遺跡 出土遺物(4)
- 図版 11 塩生遺跡 出土遺物(5)
- 図版 12 塩生遺跡 出土遺物(6)
- 図版 13 西元浜貝塚 昭和63年度
- 1 トレンチ2北壁断面
  - 2 トレンチ3北壁断面
  - 3 トレンチ4北壁断面
  - 4 トレンチ4遺物出土状況
  - 5 トレンチ7北壁断面
  - 6 トレンチ8北壁断面
  - 7 トレンチ10北壁断面
  - 8 トレンチ11北壁断面
- 図版 14 西元浜貝塚 平成2年度
- 1 1区全景(西から)
  - 2 2区全景(南から)
  - 3 3区西側
  - 4 3区東側
  - 5 4区全景(西から)
  - 6 5区西壁断面
- 図版 15 西元浜貝塚 出土遺物



# 第1章 塩生遺跡

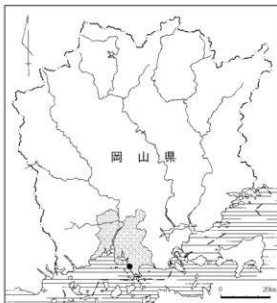
## 第1節 位置と環境

塩生遺跡は、中世までは島として独立していた見島の西岸に所在している。見島の西岸には北から種松山(258m)、鶴が辻山(284m)、竜王山(209m)などの山々が並び、山が海に迫る地形が連なっている。また、これらの山から流れ出す小河川や海流の影響によって、海岸部に多くの砂洲及び潟湖が形成されていることも特徴的である。

倉敷市見島塩生地区はこのような見島西岸でもやや南よりに位置している。東側は北東に大山(224m)、南東に竜王山がせまる急峻な地形で、北の天神ヶ鼻、南の宮の鼻と呼ばれる両岬によって区画された地域である。さらに、西の海上に浮かぶ高島も、現在は地続きとなっているが、地区に含まれている。北部には宇頭間・金浜の各集落があり、金浜集落の前には広い砂浜が広がっていたが、現在は畑地などになっている。南部の塩生集落は、竜王山から北西に延びる尾根先端を起点に北に向かって形成された長さ約800m、幅約90mにわたって延びる砂洲上およびその東側後背地の潟湖周辺に営まれている。塩生遺跡はまさにこの砂洲上に立地している。なお、潟湖は早くより水田等として利用され、現在は宅地化が進行している。また、砂洲の西側に沿っては国道430号線が通り、さらにその西側も埋め立てられて工業地帯となっており、往時の景観を見ることはかなわなくなっている。

地形的には狭小な海岸部にもかかわらず、歴史的には旧石器時代から中世にかけての多くの遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡としては、発掘調査が行われたものはないが、高島エビス鼻遺跡、金浜上遺跡、宮の鼻遺跡ではナイフ形石器が採集されている<sup>(1)</sup>。これらの遺跡は丘陵上や岬の先端部に立地し、眼前に海を見下ろしているが、旧石器時代当時にはナウマン象などの大型動物が闊歩する広い平原を望んでいたと考えられる。また、高島西遺跡ではハリ質安山岩の剥片も採集されており、細石刃文化関連の遺跡が存在する可能性がある。

縄文時代においては瀬戸内海の形成と共に、見島が島として独立し、その北岸には多くの貝塚が見られるようになる。しかし、ここ西岸においては北部の福田貝塚<sup>(2)</sup>を除いて貝塚遺跡は認められず、貝の採取に適した遠浅の海岸が形成されなかったためと考えられる。ただし、広江・浜遺跡<sup>(3)</sup>や金浜遺跡、溝落遺跡<sup>(4)</sup>など縄文時代の遺物を出土する遺跡は存在し、貝類採取にそれほど依存しない生業形態での活動があったと推定される。特に広江・浜遺跡や溝落遺跡ではサヌカイトの原材料や板状剥片が出土しており、注目される。サヌカイトの産地である讃岐と、見島北岸から玉島地域にかけて分布



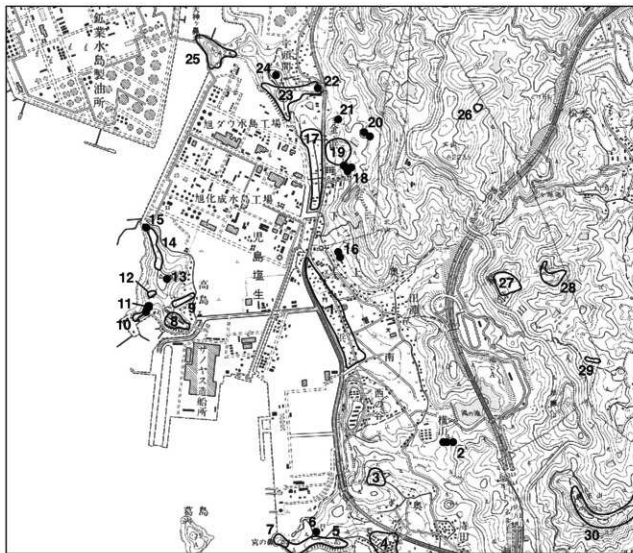
第1図 遺跡の位置



する貝塚地帯を舟で結ぶルート上に位置することから、サヌカイト交易の中継遺跡としての機能が想定される。

弥生時代の遺跡は、狭小な地形を反映してか、多くはない。しかし、塩生遺跡<sup>(5)</sup>や北の広江・浜遺跡からは弥生時代前期の土器が出土しており、砂洲の後背地である潟湖周辺を水田化して生活していたと推定されている。後期になると、砂洲や砂浜での製塩が開始されたようで、塩生遺跡でも製塩土器が出土している。

塩生地区の高島は、神武天皇の吉備高島宮伝承地の一つであるが、島の北端、標高20m程の岬上に箱式石棺1基が認められる。高島北の鼻古墳と呼ばれ、長さ1.8m程の石棺で墳丘は認められない。



- |              |           |           |            |             |
|--------------|-----------|-----------|------------|-------------|
| 1 塩生遺跡       | 2 横山古墳群   | 3 鶯ノ子遺跡   | 4 通生遺跡     | 5 宮の鼻遺跡     |
| 6 本荘八幡宮遺跡    | 7 宮の鼻城跡   | 8 高島南遺跡   | 9 高島東遺跡    | 10 高島エビス鼻遺跡 |
| 11 高島エビス鼻古墳群 | 12 高島西遺跡  | 13 高島荒神古墳 | 14 高島北の鼻遺跡 |             |
| 15 高島北の鼻古墳   | 16 馬乗場古墳群 | 17 金浜遺跡   | 18 溝落谷古墳群  | 19 溝落遺跡     |
| 20 金浜新池古墳群   | 21 金浜古墳   | 22 宇頭間古墳  | 23 金浜上遺跡   | 24 天神山古墳    |
| 25 本太城跡      | 26 堂の谷廃寺  | 27 八反墓群   | 28 神水城跡    | 29 ドンド遺跡    |
| 30 竜王山遺跡     |           |           |            |             |

第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

出土遺物もないが、周辺の岬や島嶼部には同様の箱式石棺がしばしば認められ、古墳時代前期のものと考えられている。古墳時代後期初頭には、径10m程の円墳である天神山古墳<sup>6)</sup>が築かれる。見島地区においては数少ない埴輪を持つ古墳であるが、埋葬施設は不明である。高島北の鼻古墳や天神山古墳は海を見渡せる岬先端や尾根上に立地しており、海上交通との関連で築造された古墳と考えられている。

古墳時代後期の見島沿岸地域では製塩が盛んに行われるようになる。見島西岸には、本書で報告する塩生遺跡のほかにも、湾戸遺跡、広江・浜遺跡、金浜遺跡、通生遺跡等、浜辺や砂洲上に立地する遺跡が形成されている。廃棄された製塩土器の堆積層は厚さ30～40cmにおよぶ場合があり、その盛興ぶりが偲ばれる。また、こうした海浜遺跡に近接する山麓には複数の横穴式石室墳が築造されている。金浜遺跡を望む尾根上に築かれた金浜古墳<sup>7)</sup>は、こうした横穴式石室の中でも初期のものである。倉敷考古館によって調査が行われ、小ぶりの石材を持ち返りに積んだ幅広い玄室を備えた古墳であることが判明した。他にも金浜遺跡の背後には金浜新池古墳群・溝落谷古墳群、塩生遺跡の背後には馬乗場古墳群があり、いずれも横穴式石室を主体としたものである。金浜古墳以外に調査の実施されたものはないが、石室の形態などから、6世紀後半のものと考えられる。

古代の様子はよくわかっていないが、令制備前国の見島郡に属していた。貞観7年(865)に「備前国塩莊一処」が延暦寺に所領として寄進された記録が存在し、「備前国塩莊」が塩生のことではないかとも言われている<sup>8)</sup>。その是非は今後の課題であるが、広江・浜遺跡や塩生遺跡からは古代の土器器も出土しており、当該期にも人々の活動があったことがうかがえる。

戦国時代の見島は瀬戸内海のほぼ中央に位置するという海上交通の要衝であり、東の宇喜多氏、西の毛利氏、さらには四国勢による争奪の的となっていた。塩生地区の北部、宇頭間から西に突出する標高42mの岬に築かれた本太城跡もこのような情勢下で機能した城の一つであり、近年では宇喜多氏による見島支配確立後の利用も推定されている<sup>9)</sup>。また、地区南部に突出する宮の鼻にも、堀切によって区画された小規模な城郭である宮の鼻城跡が所在している。

関ヶ原合戦後の宇喜多氏改易、続く小早川氏による短い支配の後、塩生地区を含む見島郡は岡山藩池田家の領地となる。近代以降は、明治22年(1889)に塩生村、宇野津村、通生村が合併して本荘村となり、昭和23年には見島郡見島町・味野町・下津井町と合併して見島市となった。さらに昭和42年の倉敷市・玉島市・見島市の旧三市の合併を経て、今日にいたっている<sup>10)</sup>。

## 第2節 調査に至る経緯と経過

### 1 平成5年度の調査

平成5年度の調査は、賃貸マンション建設に伴い実施されたものである<sup>11)</sup>。平成5年4月1日付けで開発行為事前協議申出書が提出され、当該地に中高層住宅(6戸)の建物を2棟建設する計画が示された。4月14日にコンサルタント会社と協議を行い、開発予定地には周知の遺跡である塩生遺跡が存在するので、事前の確認調査を行って遺跡の存在状況を把握する必要がある、その調査結果をもとに遺跡の取り扱いについての協議を行うこととした。

確認調査は、平成5年6月22日から7月21日に実施した。工事計画は第3図で示すように、南側の

区域に建物2棟を建設し、北側には道路、駐車場を敷設するものとなっている。はじめに、敷地の長軸方向にトレンチ1～3を設定して調査を行った。その結果、それぞれの地点において地表下20～40cmの深さで古墳時代後期の製塩土器を中心とした遺物包含層が検出され、開発予定区域の全面に製塩遺跡が存在することが判明した。トレンチ2では、内側に粘土を貼り付けた大型円形土坑が検出された。続いて、トレンチ4～6を設定して調査を進めたところ、トレンチ4でも粘土貼り土坑、トレンチ6では炉状遺構とその周囲から作業面が検出された。6か所のトレンチ調査で粘土貼り土坑2基と炉状遺構1基が見つかった。これらの遺構については、岡山県玉野市沖須賀遺跡<sup>(12)</sup>、香川県大浦浜遺跡<sup>(13)</sup>などで検出されたものに類似することから、中世の製塩遺構と判断された。古墳時代後期の製塩遺跡の上で中世の製塩作業が行われたことが判明したのである。

上記の調査結果報告を開発事業者に提出した後、造成工事についての埋蔵文化財発掘届が10月1日に提出された。その工事計画では、約1mの盛土造成が示されており、深部にまで掘削が及ぶ浄化槽設置予定地の発掘調査を平成6年1月20日に実施した(トレンチ7)。調査の結果、粘土貼りの土坑の底部が検出された。この土坑は火を使用した痕跡があり、炉跡の可能性が高いと思われた。破壊された後、新たに作業面が構築されていた。

平成5年度調査の後、計画された造成工事は施工されず、結局は賃貸マンションも建設されなかった。その後、土地所有者が現在の工場主へと代わり、令和2年度には工場建設が計画されることとなる。



第3図 平成5年度トレンチ配置図  
(S=1/800)

#### <調査日誌抄>

- 平成5年6月22日 機材搬入。トレンチ1～3掘り下げ開始。包含層を検出。
- 6月23日 トレンチ2で粘土貼り土坑を検出。
- 6月25日 粘土貼り土坑を完掘。写真撮影。
- 7月 6日 トレンチ4・5掘り下げ開始。トレンチ4で粘土貼り土坑を検出。
- 7月12日 トレンチ6で炉状遺構を検出。
- 7月19日 トレンチ4粘土貼り土坑の底から中世土器出土。
- 7月20日 トレンチ2・4・6写真と実測完了。
- 7月21日 全てのトレンチで埋め戻しを完了し、機材撤収。
- 平成6年1月20日 浄化槽設置予定地(トレンチ7)の発掘調査を実施。

## 埋生遺跡発掘調査委員会

委員長	山田錦造	倉敷市教育委員会 教育長
副委員長	川上昌城	倉敷市教育委員会 教育次長
委員	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会 会長
専門委員	福本 明	倉敷埋蔵文化財センター 学芸員
専門委員	鍵谷守秀	倉敷埋蔵文化財センター 学芸員
専門委員	小野雅明	倉敷埋蔵文化財センター 学芸員
専門委員	中野倫太郎	倉敷埋蔵文化財センター 学芸員
専門委員	片岡弘至	倉敷埋蔵文化財センター 学芸員
監 事	三宅正廣	倉敷埋蔵文化財センター 館長
事務局長	武田俊宏	倉敷埋蔵文化財センター 館長補佐

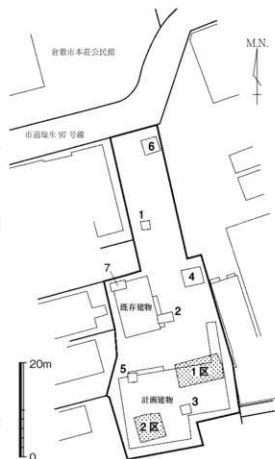
(肩書き及び役職名等はいずれも調査当時)

## 2 令和2年度の調査

令和2年度の調査は、工場建設に伴い実施されたものである。平成5年度の調査後、賃貸マンションは建設されることなく、該当地は資材置き場等として利用され、土地所有者も代わっていた。現在の土地所有者は、これまで大規模な建物等を建設することなく事業を行っていたが、雨天時の作業や周辺への騒音などを考慮すると、今後の事業継続に支障を来すことから、新たに天井クレーン等を備えた建物を建設することとしたものである。

令和2年7月8日に倉敷埋蔵文化財センターと設計業者との間で開発事前協議が行われた。この日は業者から建設計画の概要を何うとともに、業者に対しては過去の調査の概要および埋蔵文化財の取り扱いについて説明した。業者からの説明では、工場の建築面積は約300㎡、敷地の南方に建設し、直径60cmの地盤改良杭31本を打設するとのことであった。埋蔵文化財センターとしては、地盤改良杭を減らすなどして地下遺構への影響を減らすように要請した。しかし、地盤が軟弱な砂地であることから杭の削減は困難であること、また、建設は9月半ばには始めたいとの説明もあった。このため、やむをえず発掘調査を行い、遺跡を記録保存とすることとなったが、具体的な調査方法等については検討して回答することとし、この日の協議を終えた。

今回の計画建物は敷地南部に予定されており、平成5年度に調査したトレンチ3・5と重なっている。この両トレンチからは包含層と数基のピットが確認されているが、他のトレンチと比較して包含層が薄く、粘土貼りの土坑等も検出されていないことから周囲の遺構



第4図 令和2年度調査区配置図  
(S=1/800)

密度も低いと判断された。工事開始期日まで時間がなくとも合わせ検討した結果、やむをえず範囲を限定した調査を行うこととした。その後、設計業者との数回の協議を経て、発掘調査は8月4日より1ヶ月間の予定で実施し、調査範囲については平成5年度に調査したトレンチ3・5をはずす形で、約70㎡について実施することで合意した。なお、調査面積については、重要な遺構等が検出された場合は拡大することも付け加えられた。令和2年7月14日付けで施主から埋蔵文化財発掘の届出が提出され、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、令和2年8月4日から8月25日にかけて実施した。調査区は平成5年度に調査したトレンチ3・5をはずし、かつ、掘削した土砂の置き場を確保するため2か所に分けて設定した。計画建物の中央南寄りにトレンチ3、北西隅にトレンチ5が係ることから、計画建物の北東部と南西部に調査区を設定し、前者を1区、後者を2区とした。面積は、1区が約45㎡、2区が約25㎡である。

調査地は資材置き場として利用するために厚さ1m程の造成が行われており、掘削はこれを取り除くことから開始された。1区は8月4日中に造成土・旧耕作土の除去を完了し、8月5日から包含層の掘削・遺構の検出を開始し、2区については8月5日に造成土・旧耕作土の除去を実施し、1区の調査が一段落する8月18日以降に包含層の掘削を開始した。包含層の遺物は古墳時代後期の製塩土器がほとんどであったが、古代の土器や中世土器も含まれており、二次的な堆積と推定されたため、日付毎に一括して取り上げた。遺構としては、1区では炉状遺構1基、集石遺構1か所、土壇墓2基、土坑2基、ピット3基が、2区ではピット5基、土器溜まり1か所が検出された。1区東壁に係る形で検出された炉状遺構は、敷地の東端に近いことから調査範囲の拡張ができず、全体を調査することができなかったが、土層観察から包含層上面から掘り込まれていることを確認した。集石遺構については、古いものであるとの確証が持てなかったため、写真実測用の撮影を行った後に取り上げた。その後、直下から人骨が検出され、土壇墓2の地上構造であることが判明した。また、土壇墓2基については現地での実測時間が確保できなかったことから、基準点を含めた複数枚の写真撮影し、後日、写真から実測することとした<sup>14)</sup>。1区中央で検出された土坑3は、中に堆積した遺物を取り上げた後に、半裁し、写真撮影・実測した。2区については、包含層の遺物を取り上げた後に、土器溜まりを精査し、平面測量・写真撮影を実施した。その後、土器溜まりの遺物を取り上げ、ピットの検出、写真撮影、実測を行った。1・2区ともに、遺物を含まない砂層が検出されたところで、掘り下げを終了した。8月25日に機材を撤収し、発掘調査を完了した。

#### <調査日誌抄>

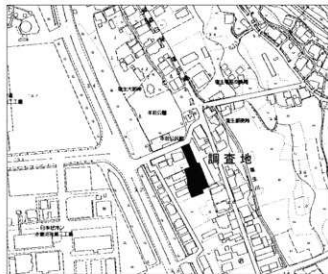
- 令和2年8月 4日 機材搬入。1区 重機によって造成土・旧耕作土を掘削。  
 8月 5日 1区 包含層上面の写真撮影。包含層掘り下げ開始。炉状遺構・集石遺構検出。  
 2区 重機によって造成土・旧耕作土を掘削。  
 8月 6日 1区 集石遺構の写真撮影。掘り下げ継続。  
 8月12日 1区 土坑3検出。  
 8月13日 1区 土壇墓1検出。  
 8月18日 1区 土壇墓2検出。土坑3等の写真撮影。  
 2区 包含層掘り下げ開始。  
 8月19日 1区 遺構の平板測量。  
 8月20日 1区 土壇墓1・2の写真撮影・人骨取り上げ。

- 2区 遺構の精査、土器溜まりの測量・写真撮影。  
 8月21日 1区 完掘状況写真撮影。セクション実測。終了。  
 2区 完掘状況写真撮影。平板測量。  
 8月25日 2区 セクション実測。遺構実測。機材撤収。

調査にあたっては、地権者ならびに施主の方々には大変お世話になった。また、報告書作成にあたって次の方々にはたいへん有益なご教示・ご支援を賜った。記して感謝申し上げます。岡崎隆司、瀬川涉、高田恭一郎、富岡直人、真鍋篤行、村上幸雄、吉原 睦、四田寛人（敬称略）

### 第3節 調査の概要

調査地は倉敷市児島塩生字濱1919、1958-1、1920-2で、南北に細長い砂洲地形のほぼ中央付近にあたる。奥行きのある土地ではあるが、道路に接する北側が通路状でやや狭く、南側が広い複雑な形状である。平成5年度の調査以前は畑地として利用されている。道路を挟んで北側には、現在倉敷市本荘公民館・本荘公園が所在し、ここは昭和47年（1972）に移転するまで、本荘小学校の敷地であった。また、西側を砂洲に沿って走る国道430号線以西は、現在でこそ工場が建ち並んでいるが、1970年代まではすぐに海であり、旧本荘小学校の西側には港も存在していた。東側には塩生郵便局や消防器庫（移転）も近接しており、周辺は地区の中心的な場所と言える。なお、本荘公園の北側には塩竈大明神が鎮座している。創建年代などは不明であるが、遺跡の内容と関連し、興味深い。



第5図 調査地位図 (S=1/5,000)

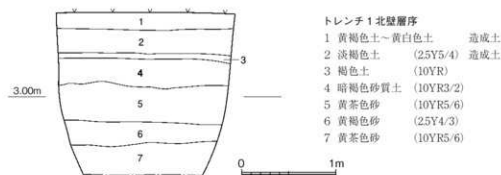
#### 1 平成5年度の調査概要

##### トレンチ1 (2m×2m)

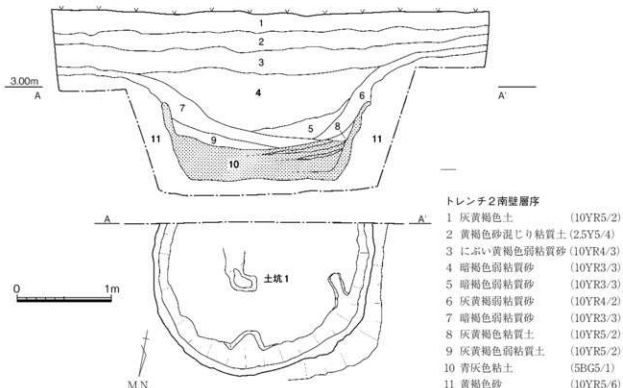
厚さ約40cmの造成土の直下で包含層が確認された。この包含層は褐色を呈する厚さ70cmの土層で、3～5層に分かれる。3・4層は砂質土で、製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物、中世の遺物を含む。5層は砂層で、製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物を含む。その下に縄文晩期の遺物を含む砂層（6・7層）がみられ、深鉢の胴部片が少量出土した。

##### トレンチ2 (2m×4.6m)

地表下約40cmで製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物、中世の遺物を含む包含層（3層）が確認され、その下から壁面に粘土を貼った円形の土坑1が検出された。土坑1は、平底の椀状を呈し、粘土の厚みを含めると検出面での直径が約2.3m、底径1.5m、深さ80cmを測る。黄褐色の海砂層（11層）を掘り込んでその内壁に青灰色粘土を貼りつけている。粘土の厚みは、側面の部分が10cm程度である。底部分の厚さは30cm程度となっているが、遺構上部から剥がれ落ちた粘土が堆積した層も



第6図 トレンチ1北壁断面図 (S=1/40)

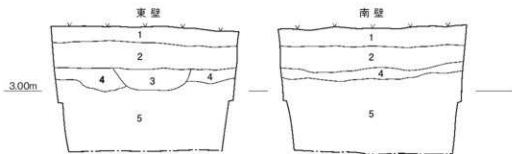


第7図 トレンチ2南壁断面図・遺構平面図 (S=1/40)

含まれると考えられる。トレンチ4で検出された土坑2を参考にすれば、底の厚みは20cm程度と推定される。土坑内埋土の4～9層には製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物が多く含まれる。周辺から土坑内に流れ込むような6・7層には、拳大の角礫が多く含まれる。角礫は花崗岩が主体で、熱を受けて赤みを帯びているものもある。

#### トレンチ3 (2m×2m)

厚さ約20cmの耕作土の直下で、製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物、中世の遺物を含む包含層(2・4層)が確認された。4層を切り込む小さな土坑が断面観察で確認された(3層)。出土遺物がないため時期は不明である。

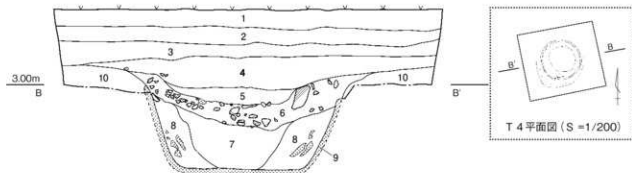


## トレンチ3東壁・南壁層序

- |                        |                     |
|------------------------|---------------------|
| 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 耕作土 | 4 にぶい黄褐色砂(10YR4/3)  |
| 2 黒褐色砂 (10YR3/2)       | 5 黄褐色砂 (10YR5/6) 海砂 |
| 3 黒褐色砂 (5YR3/1) 土坑埋土   |                     |

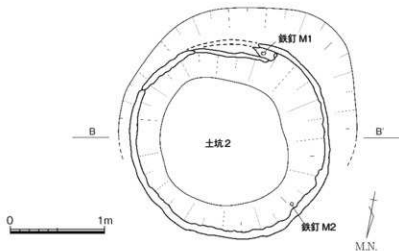
0 1m

第8図 トレンチ3東壁・南壁断面図 (S=1/40)



## トレンチ4層序

- |                          |  |
|--------------------------|--|
| 1 耕作土                    |  |
| 2 黄褐色砂混じり粘質土 (2.5Y5/4)   |  |
| 3 褐色砂混じり粘質土 (7.5YR4/6)   |  |
| 4 極暗褐色砂混じり粘質土 (7.5YR2/3) |  |
| 5 黒褐色砂混じり粘質土 (7.5YR3/2)  |  |
| 6 灰褐色砂混じり粘質土 (7.5YR4/3)  |  |
| 7 極暗褐色砂 (10YR2/3)        |  |
| 8 にぶい黄褐色砂 (10YR4/3)      |  |
| 9 青灰色粘土 (5BG5/1)         |  |
| 10 黄褐色砂 (10YR5/6)        |  |

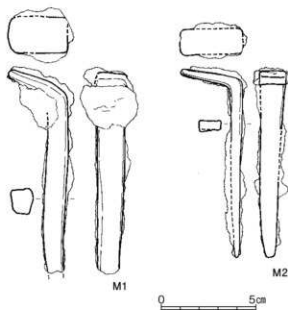


第9図 トレンチ4断面図・遺構平面図 (S=1/40)

## トレンチ4 (4m×4m)

地表下約40cmで製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物、中世の遺物を含む包含層(3層)が確認され、その下から壁面に粘土を貼った円形の土坑2が検出された。土坑2も土坑1と同様の形状で、平底の碗状を呈する。粘土の厚みを含めると検出面での直径が約2.1m、底径1.4m、底面までの深





第10図 土坑2出土鉄器 (S=1/2)

鉄釘 **M1** は南側に打ち込まれており、先端を欠失している。残存長10.9cm、折り曲げられた頭部は3.2cm×1.9cm、身部断面は1.5cm×1.2cmと太めである。鉄釘 **M2** は北西側に打ち込まれており、ほぼ完形である。長さ10.0cm、頭部は3.3cm×1.5cm、身部断面は1.1cm×0.6cm、**M1** と比較して小振り、薄手である。

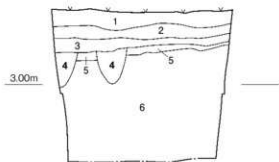
トレンチ5 (2m×2m)

地表下約30cmで、製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物を含む包含層(3層)が確認された。その下の5層からは、弥生時代後期の製塩土器、古墳時代中期の製塩土器が出土した。5層は遺物を含まない海砂層(6層)の直上でみられ、厚さは10cm程度である。この層を切り込む小さなピット2基が断面観察で確認された(4層)。出土遺物はなく、時期は不明である。

トレンチ6 (3m×3m)

この地点では包含層は確認されず、既に削平されていると考えられるが、地表下約30cmで炉状遺構1が検出された。この遺構は、掘り窪めた穴の中に厚さ20～30cmの黄褐色粘土(10層、山土であろう)を貼って壁体としている。東端は現代のかく乱によって破壊されているため形状が不明確であ

さは85cmを測る。黄褐色の海砂層(10層)を掘り込んで構築され、遺構の断ち割り調査は行わなかったが、厚さ10cm程度の青灰色粘土を貼りつけていると推定される。土坑2で特筆すべきは、壁に対して垂直に打ち込まれ、頭を出した状態で鉄釘(**M1**・**M2**)が2点出土したことである。平面位置は第9図で示すとおりで、土坑底面からの高さは、北側のものが50cm、南側のものが68cmである。土坑内埋土の5層には製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物を中心に、古代、中世の遺物が含まれる。6層には2～20cmの花崗岩角礫が多く含まれる。8層には遺構上部から剥がれ落ちたと考えられるブロック状の粘土が含まれる。この層の底からほぼ完形の中世土師器碗(177)が1点出土した。



トレンチ5南壁層序

- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 耕作土
- 2 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)
- 3 黒褐色砂質土 (10YR3/2)
- 4 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) ピット埋土
- 5 にぶい黄褐色砂 (10YR4/3)
- 6 黄褐色砂 (10YR5/6) 海砂

第11図 トレンチ5南壁断面図 (S=1/40)



るが、検出面での平面形は西端の幅に比べて東端の幅が狭くなっている。内法は、東西1.4m程度と推定され、南北は西端で1.2mを測る。底面は西が高く、東西端の落差は15cm程度ある。底面周囲に沿って、10～20cmの大きさが不揃いの角礫が6個並べられている。これらの角礫は平らな面を上に向けているようでもない。各礫頂部の高さは最大5cm程の差があり、西高東低である。炉の底面は焼けて硬くなっており、黒色を呈す。表面には土師器の刷毛目に似た調整痕が観察できる。また、北側において別の黄褐色粘土による炉壁の一部が存在することから、作り替えが行われたと思われる。

#### トレンチ7(2m×3m)

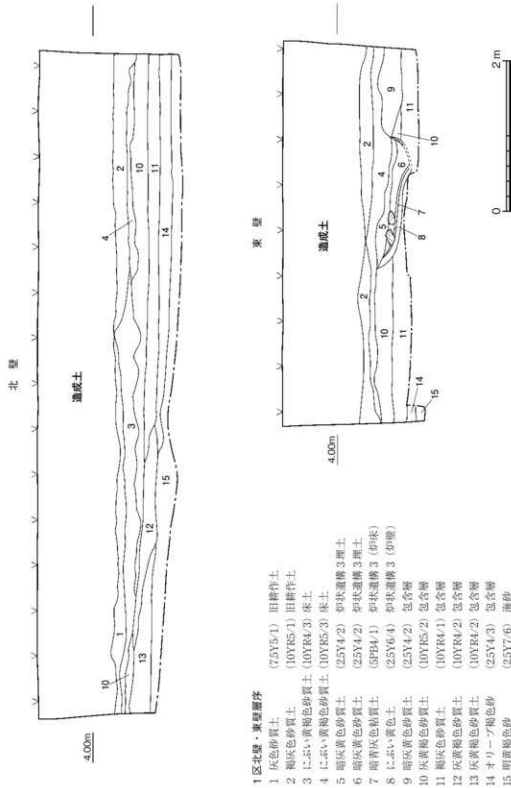
浄化槽設置工事に先立つ発掘調査として実施したものであるが、規模が小さいため確認調査に後続するトレンチとして扱う。厚さ20～25cmの造成土の直下で製塩土器を主体とした古墳時代後期の遺物、中世の遺物を含む包含層(6～9層)が確認された。これら層を切り込む小さなピット4基が断面観察で確認された(2～5層)。その下には厚さ5cm程度のにぶい黄橙色粘質土(10層)がトレンチの西壁から南西隅の範囲にかけて広がる。この層を掘り下げると炉状遺構2が壁面で検出された。内部には炭化物を含む黒褐色土と10層に類似するにぶい黄橙色粘質土がブロック状に混じる11層が入り、底には土坑1・2の壁面に用いられた粘土に類似する青灰色粘土と黒褐色土が入り混じる12層がみられた。青灰色粘土は壁面に貼り付くものと思われる。小範囲の調査であるため規模は不明であるが、検出面で直径1.3～1.4m程度の大きさと推定され、11層中の粘土が炉状遺構1の壁面に用いられた山土にも類似すること、炭化物を含む黒褐色土の存在から炉跡の可能性が高い。炉状遺構2が廃棄された後に10層の土で固めて作業面が形成されたと考えられる。炉状遺構2が切り込む黒褐色土(13層)は古墳時代後期の包含層で、石鏃も出土した。その下のにぶい黄褐色砂(14層)の上面には少量の遺物が認められたが、基本的には遺物を含まない海砂である。

## 2 令和2年度の調査概要

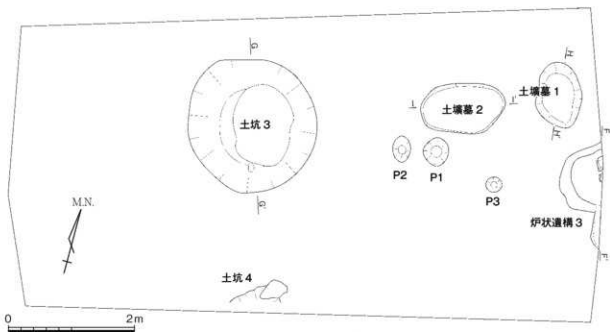
### (1) 1区の調査

1区は計画建物の北東部分に約9m×5mの範囲で設定し、主に調査区の南側を排土置き場とした。断面の観察は北壁と東壁で実施した。基本層序をみると、厚さ20～30cm程の旧耕作土(1～4層)の下が、包含層(9～14層)となり、包含層の下は遺物を含まない明黄褐色砂(15層)である。包含層内の遺物のほとんどは古墳時代の製塩土器であるが、古墳時代の須恵器をはじめ、古代・中世の土師質土器や骨角器、獣骨等も含まれている。包含層の上層にあたる暗灰黄色砂質土(9層)・灰黄褐色砂質土(10層)は、東で厚さ約20cm、西へいくと約10cmと薄くなる。製塩土器の他に古代・中世の土器片が含まれるが、その密度は下層より低く、上面も荒れているため、一定程度の攪乱を受けていると考えられる。その下は製塩土器を多く含む包含層(11～13層)で、西から東へ緩やかに下る斜面堆積となっている。この三層のうち、いちばん西の灰黄褐色砂質土(13層)はほぼ製塩土器の堆積と言ってよく、東に行くにつれて土器の包含量は減っている。包含層最下層であるオリーブ褐色砂(14層)は、遺物の密度も低く、さらに下の明黄褐色砂(15層・無遺物層)と包含層(11・12層)との遷移層と考えられる。明黄褐色砂(15層・無遺物層)の上面は調査区の西端で標高3.25m、東端で標高2.95mと東へ向かって下がっていることが確認された。

遺構としては土塚墓2基、炉状遺構1基、土坑2基、ピット3基が検出された。なお、遺構の番号は



第14図 1区北壁・東壁断面図 (S=1/50)

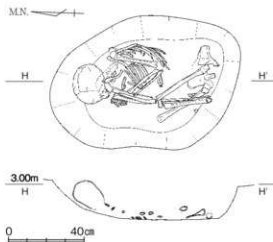


第15図 1区遺構配置図 (S=1/60)

平成5年度の調査に続くものとする。

#### 土墳墓1

土墳墓1は調査区の東端、やや北寄りで検出された。幅0.7m、長さ1.0m、検出面からの深さ0.2m程の墓塚で、遺体は頭部を北に向け、体が西を向くようにし、手足を折り曲げた状態で埋葬されていた。頭部や四肢、肋骨などはよく残っていたが、椎骨はほとんど残っていなかった。小柄な体躯から女性か成人前の人物ではないかと推定される。副葬品などは確認されなかったが、埋土から長さ6.5cmの鉄釘1点(M5)が検出されている。なお、土墳墓2のような集石は確認されなかった。



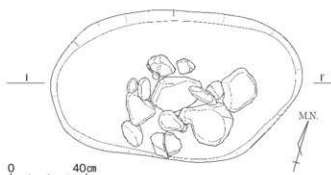
第16図 土墳墓1平面図・断面図 (S=1/20)

#### 土墳墓2

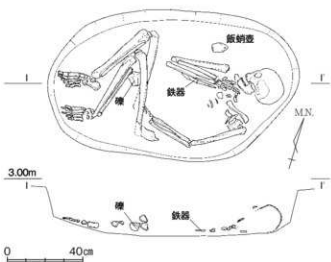
土墳墓2は土墳墓1の西側0.5m程の場所で検出された。土墳墓上には地上構造として、拳大から人頭大の礫が集積されていたようである<sup>(95)</sup>。墓塚は幅約0.8m、長さ1.3m、検出面からの深さ0.2m程で、遺体は頭部を東に向け、体は北を向くようにし、手足を折り曲げた状態で埋葬されていた。右腕は手先が頭のあたりに来るように折り曲げられ、左手は腰のあたりに置かれていた。頭部と四肢の骨はよく残っているが、肋骨・椎骨はほとんど残っていなかった。大腿骨の大きさなどから、大柄の人物であったと推定される。右腕に沿って置かれたイソガネではないかと推定される鉄器(M3)は副葬品と考えられる。先端を脚の方に向けており、長さ約20.5cm、最大幅3.0cm、厚さ0.6cmである。茎尻から約4.5cmまで木質が遺存し、柄は木質だったことがわかる。また、木質が途切れる付近に関らしき部分が認められるが、はっきりしない。茎尻から約

11.5cmには切羽状金具がはめ込まれていたようである。この切羽状金具は鉄製で、本体に対して75°傾いており、損傷が激しいが、本来は楕円形であった可能性が高い。断面矩形の茎部は全体に先端に向かって徐々に拡がっていくが、切羽状金具から4cm程のところで、大きく拡がり、また、約40°の角度で折れ曲がっている。ここからを刃部として、断面は矩形から弓なりに近い形状に変化する。刃部の最大幅は3cm程で先端から約4cm付近にあり、対象形ではなく、片側がすり減ったように引っ込んでいる。

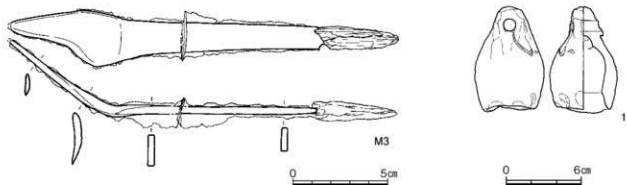
右腕に近い部分から完形の飯蛸壺1点(1)も出土している。高さ8.4cm、径5.6cm、孔径0.9cmである。吊り手部は体部をつまみ出すように形成され、体部とは比較的明瞭に分かれている。その上面に溝はなく丸みを帯びて仕上げられている。体部内面はきれいに横ナデが行われ、特に底端部は強くナデで端部を薄くしようとの意思が認められる。また、体部外面も丁寧にナデられ



第17図 土壌墓2集石検出状況 (S=1/20)

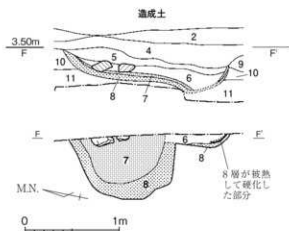


第18図 土壌墓2平面図・断面図 (S=1/20)



第19図 土壌墓2出土遺物 (S=1/2・1/3)

て、吊り手部と底端部以外の指圧痕を消そうとしている。穿孔から続く線刻のようなものが認められるが、工具が偶発的に当たったものかもしれない。また、そのそばに初圧痕のようなものも認められる。孔には使用による紐擦れの痕跡などが認められず、未使用品の可能性がある。

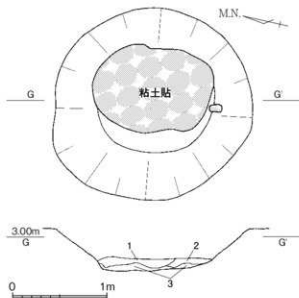


第20図 炉状遺構3平面図・断面図 (S=1/40)

炉状遺構3 周辺層序

- |             |           |           |
|-------------|-----------|-----------|
| 2 褐灰色砂質土    | (10YR5/1) | 旧耕作土      |
| 4 にぶい黄褐色砂質土 | (10YR5/3) | 床土        |
| 5 暗灰黄色砂質土   | (25Y4/2)  | 炉状遺構3埋土   |
| 6 暗灰黄色砂質土   | (25Y4/2)  | 炉状遺構3埋土   |
| 7 暗青灰色粘質土   | (5PB4/1)  | 炉状遺構3(炉床) |
| 8 にぶい黄色土    | (25Y6/4)  | 炉状遺構3(炉壁) |
| 9 暗灰黄色砂質土   | (25Y4/2)  | 包含層       |
| 10 灰黄褐色砂質土  | (10YR5/2) | 包含層       |
| 11 褐灰色砂質土   | (10YR4/1) | 包含層       |

- 炉壁(にぶい黄色土)
- 焼けた炉床面(暗青灰色粘質土)



粘土貼層序

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 1 黒褐色粘質土  | (10YR3/1) |
| 2 明黄褐色粘質土 | (10YR7/6) |
| 3 黄褐色砂質土  | (10YR5/6) |

第21図 土坑3平面図・断面図 (S=1/40)

炉状遺構3

調査区の東端で確認されたもので、全体を把握できていない。平面的には北側のいびつな円形の部分と南側に突出する部分から成る。北側は径1.1m程で、浅い窪みに明黄褐色の山土(厚さ約6cm)を貼り、さらに暗灰色の粘土(厚さ約2cm)を貼り付けたもので、内側に15~20cm大の角礫が配置されている。南側の突出部は長さ50cm程で、深さ約20cm、不明瞭ながら底には北から続く明黄褐色の山土が貼り付けてあり、南端の立ち上りの部分では比熱し、硬化している。平成5年度に検出された炉状遺構1と同様のものと推定される。灰黄褐色砂質土(10層)上から掘り込まれており、中世以降のものである可能性が高い。

土坑3

土坑3としたものは調査区のほぼ中央で確認された。直径約2m、深さ約50cmで、底には南北1.3m、

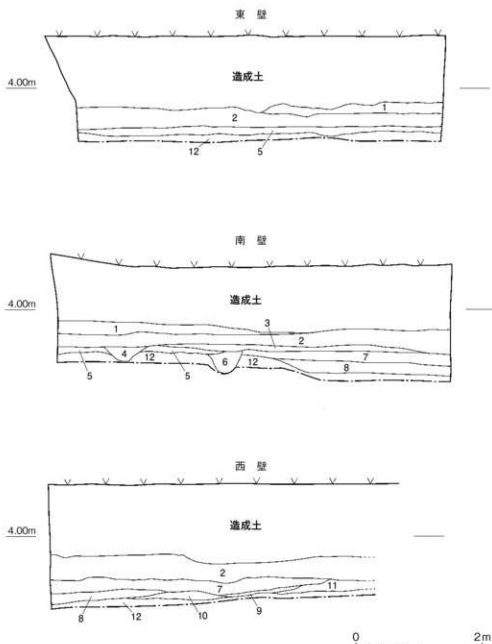
東西0.9mの楕円形の範囲に厚さ20cm程の粘土が貼られていた。遺構の掘り込み面が不明なので、本来の深さは判然としないが、粘土貼は土坑側面に及ぶものではない。平成5年度に検出された土坑1・2は深さが1m程もあり、全面に粘土が貼られる等、今回のものとは趣を異にしている。構築途中、あるいは使用後に破壊・放棄された探検土坑である可能性もある。

土坑4・ビット

土坑4は調査区南壁のほぼ中央に係る位置で検出された。排土置き場の真下であり、調査期間の制約もあって、調査区を拡張しての調査はできなかった。現状で、幅1.8m、深さ0.5m程の規模で、底には土器が溜まっていた。部分的に灰白色粘土塊が認められることから、土坑1~3と同様のもの

である可能性が高い。

ピットは土壌墓2の南側で3基を検出した。ピット1は径45cm程、ピット2はやや楕円形で長径40cm、短径30cm程、ピット3は径25cm程である。一列に並ぶわけではなく、3基の間の距離も均等ではなく、性格は不明である。



2区東壁・南壁・西壁層序

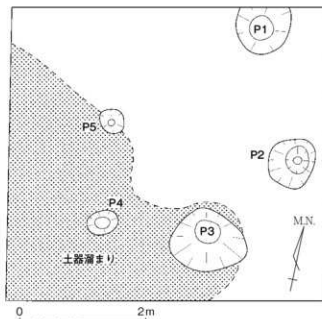
- |                           |                            |
|---------------------------|----------------------------|
| 1 黄灰色土 (25Y4/1) 旧耕作土      | 7 黒褐色砂質土 (25Y3/1) 土器溜まり埋土  |
| 2 暗灰黄色砂質土 (25Y5/2) 旧耕作土   | 8 黒褐色砂質土 (25Y3/2) 土器溜まり埋土  |
| 3 黄灰色土 (25Y5/1) 攪乱を受けた包含層 | 9 黄灰色砂質土 (25Y4/1) 土器溜まり埋土  |
| 4 黄灰色細砂 (25Y4/1) ピット埋土    | 10 黒褐色砂質土 (25Y3/1) 土器溜まり埋土 |
| 5 黄褐色砂質土 (25Y5/3) 包含層     | 11 黒褐色砂質土 (25Y3/1) 土器溜まり埋土 |
| 6 黒褐色砂質土 (25Y3/1) ピット埋土   | 12 明黄褐色細砂 (10YR7/6) 海砂     |

第22図 2区断面図 (S=1/50)



## (2) 2区の調査

2区は計画建物の南西部分に約5m×5mの範囲で設定し、主に調査区の東側を排土置き場とした。断面の観察は北壁を除く3面で実施した。基本層序は、厚さ40cm程の旧耕作土(1・2層)の下が包含層(5層)となり、調査区南西角にむかって土器溜まり(7~11層)が確認された。土器溜まりの下は明黄褐色細砂(12層・無遺物層)である。この砂層は調査区の北東端で標高2.9m、南西端で標高2.6mと南西へ向かって下がっていることがわかる。また、包含層・土器溜まりの遺物のほとんどは古墳時代の製塩土器であるが、須恵器、獣骨等も含まれている。



第23図 2区遺構配置図 (S=1/60)

検出された遺構はピット7基である。面的に検出されたものは5基で、後の2基は南壁に係る状態で検出された。北壁にかかる位置で検出されたピット1はやや大きく、耕作土直下から掘り込まれており、径約85cm、深さ約75cmである。ピット2は径約80cm、深さ30cm程である。ピット3~5は土器だまりの下から検出された。ピット3は長径約1.2m、短径1m、深さ0.3m程と浅い。ピット4・5は径50cm程の小さいものである。埋土としてはいずれも製塩土器を含む砂が詰まっていたが、有意に並ぶわけがなく、性格は不明と言わざるを得ない。

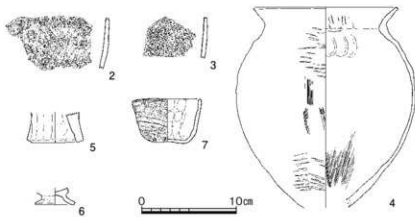
## 3 遺物

遺物としては製塩土器が最も多いが、縄文時代から近世までの各時期の遺物も出土しており、以下器種ごとに解説する。

## 縄文土器 (第24図2・3)

2・3はトレンチ1の遺物包含層から出土した。縄文時代晩期の深鉢形土器の胴部片と考えられる。

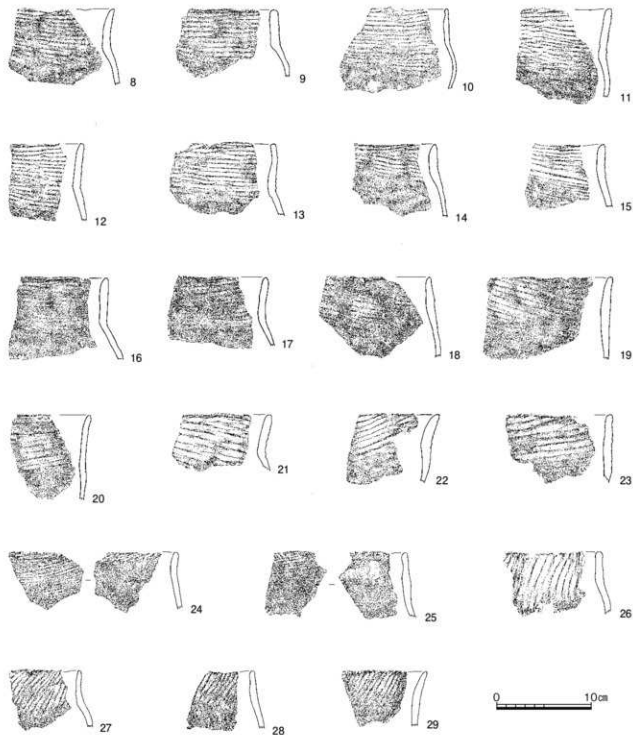
2の外面には斜方向の粗いケズリ痕が残り、内面は横ナデ調整で平滑に仕上げる。胎土中に1mm前後の砂粒が多く含まれる。3は内外面ともナデ調整が施されるが、外面は胎土中に含まれる1mm前後の砂粒が表に浮き出るような粗い調整である。内面は横ナデ調整で平滑に仕上げる。



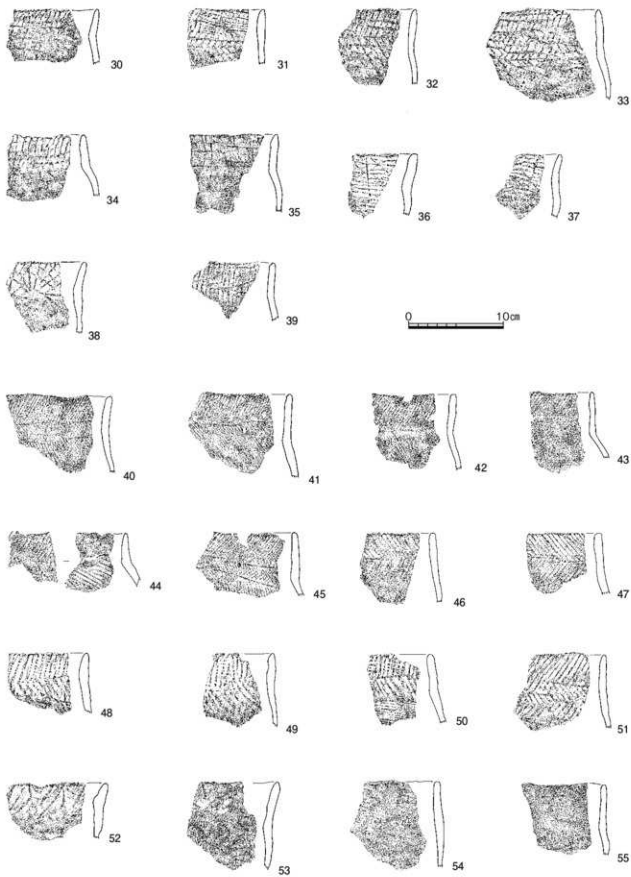
第24図 縄文土器・弥生土器・製塩土器1 (S=1/4)

## 弥生土器 (第24図4)

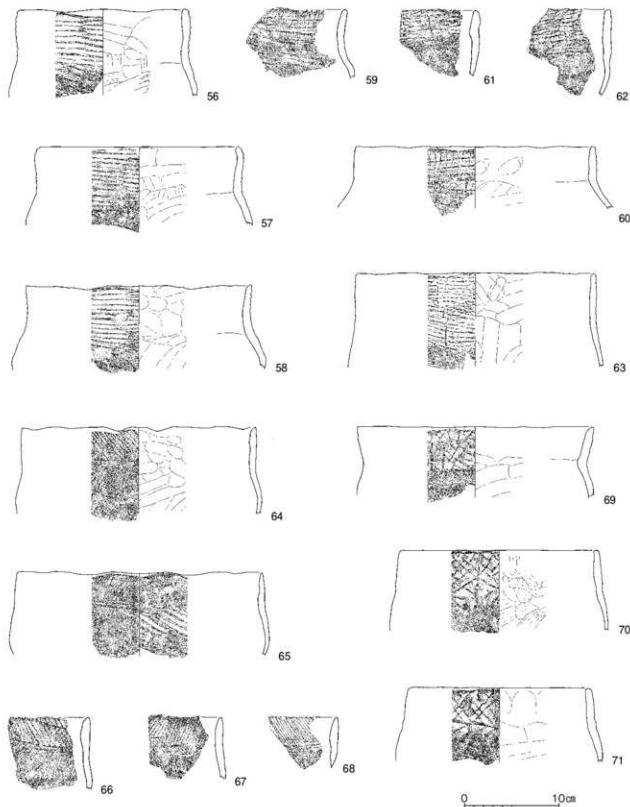
4は弥生時代後期後半の甕である。口縁部は「く」の字形に折り曲げられ、端面を持っている。調整は明瞭ではないが、口縁部内面及び胴部外面上方と下方にタタキ目をナデ消した痕跡が認められ、頸部内面に指圧痕、胴部中程の内外面にはハケメが認められる。



第25図 製塩土器2 (S=1/4)



第26図 製塩土器3 (S=1/4)

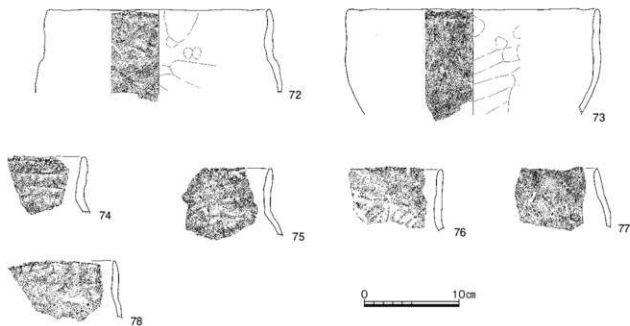


第27図 製塩土器 4 (S=1/4)

製塩土器 (第24図5～第32図145)

5～55が平成5年度の調査で出土したもの、56～145が令和2年度の調査で出土したものである。

5は弥生時代後期の製塩土器の脚部と考えられる。外面に押圧、内面にはナデ調整が施される。6



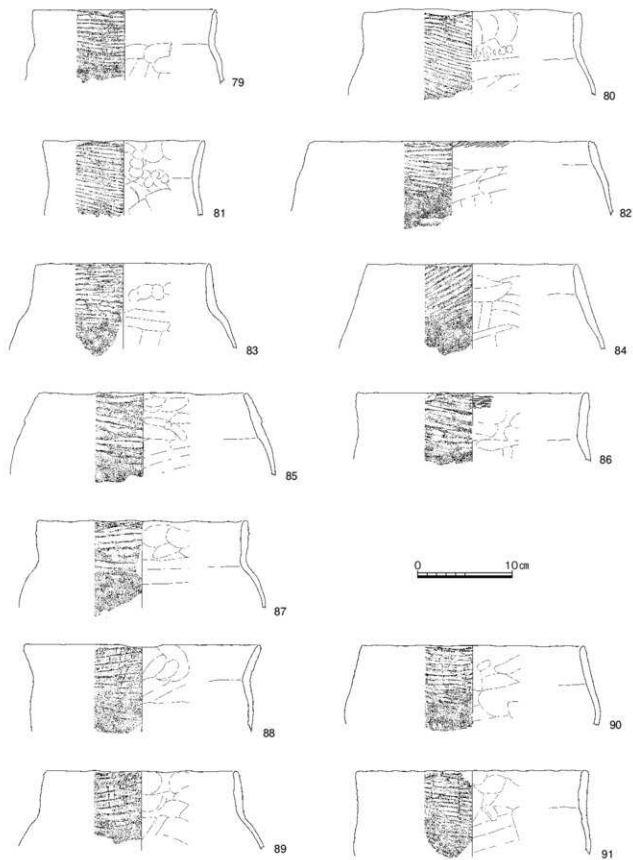
第28図 製塩土器5 (S=1/4)

は古墳時代前期の製塩土器の脚部と考えられる。外面に押圧、内面にはナデ調整が施される。体部の底がわずかに残る。7は古墳時代中期末頃の小椀形の製塩土器で、外面には平行タタキが施される。内面は指痕が一周しており、タタキ締め時のものとみられる。

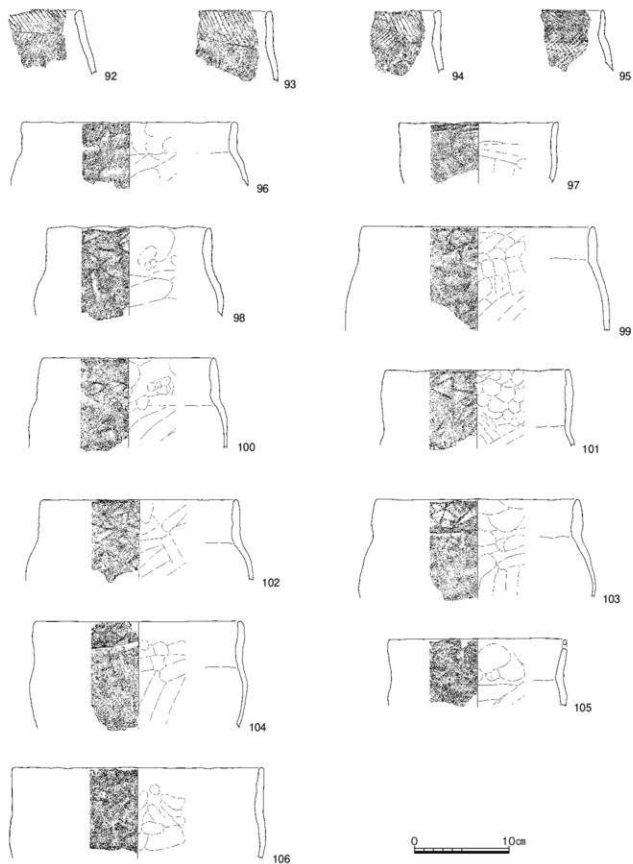
8～145は古墳時代後期の製塩土器で、広口で丸底の器形となる。口縁部外面にはタタキ調整を施し、それ以下の体部には指頭痕などの凹凸が残る。体部内面はナデ調整を主とした比較的丁寧な調整が施されており、工具を縦横斜めといった様々な方向に動かして調整しているものが多い。口縁部内面は、工具や指で軽くナデ調整を加えるものもあれば、指頭痕、掌痕などの凹凸を残すものもある。形態については、口縁部に厚みを持たせて体部を膨らませるものが中心で、その境がく字状に屈曲して明瞭なものもあるが、口縁部から体部までが緩やかな曲線となり、境があいまいなものが多い。口縁部の立ち上がりは、内湾するもの、直立するもの、内傾するものなどがある。

8～29・56～58・79～87・107～122・124・130～144は平行タタキをもつ。横位の平行タタキが多い中、22・27～29は斜位の平行タタキをもつ。26は縦位の平行タタキをもつ。24・25は間隔が密な平行タタキをもち、内面の口縁端部には細い条線が斜めに付けられる。30～35・59・60・88・89は目の細かい斜格子目タタキをもつ。38・69～71は斜格子目に水平線を加えたようなタタキ目である。36・37・61～63・90・91は横長格子目状のタタキをもつ。数条の横線に縦線と×印を加えたようなタタキ目である。40～51・64～68・92～95は矢羽根形のタタキをもつ。44の体部内面には二枚貝条痕がみられる。127～129・145のタタキ目は一本の横線の上下に間隔の密な縦線が付く文様で、矢羽根形に似ている。65の体部内面には平行タタキ目のような圧痕がみられる。98～103は太く短い凸線を組み合わせたような粗雑なタタキ目である。53～55・72～78・97・104～106・123・126・136・137はナデ消されたためか、タタキ目がほとんどみられない。105の口縁端には内側からの焼成後穿孔が認められる。

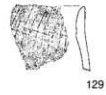
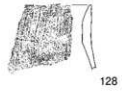
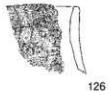
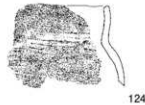
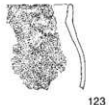
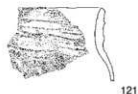
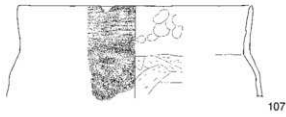
今回の調査で出土した古墳時代後期製塩土器の中で最も多いのが横位平行タタキである。特に、2



第29図 製塩土器6 (S=1/4)

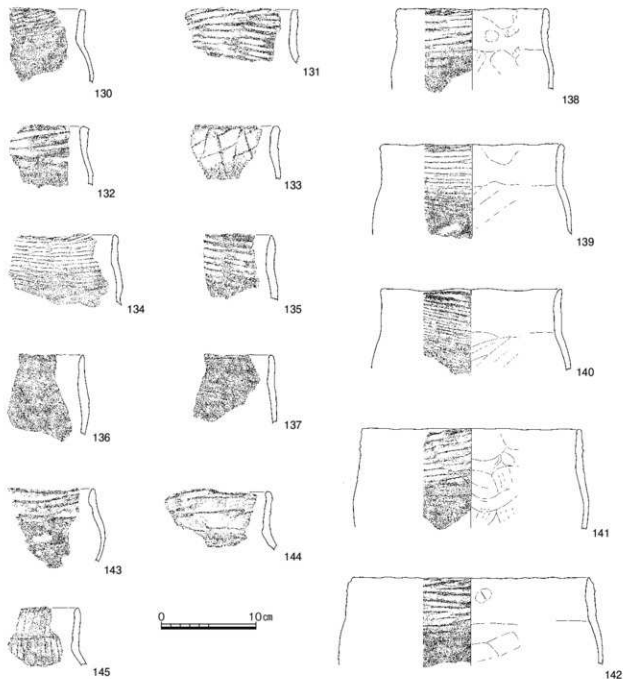


第30図 製塩土器7 (S=1/4)



第31図 製塩土器8 (S=1/4)



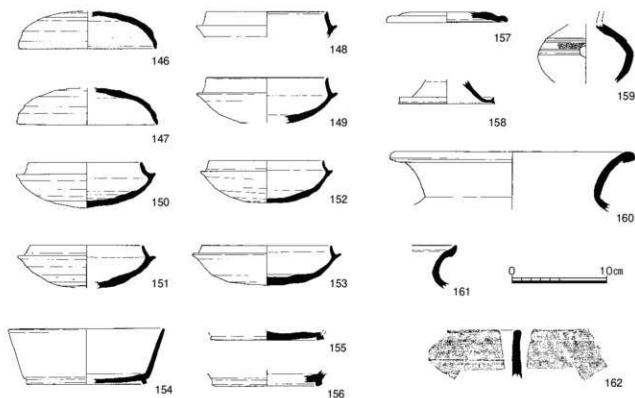


第32図 製塩土器9 (S=1/4)

区において、出土遺物のほとんどがこの土器である。次いで矢羽根形、目の細かい斜格子目タタキ、横長格子目状のタタキなどがそれぞれ少量加わるといった割合である。また、98～103のような意匠不明の粗雑なタタキ目は1区土器溜まりで出土しているが、他の地点ではみられなかった。

須恵器（第33図146～162）

146・147は坏蓋である。いずれも口径約15cm、器高4.0cmで、天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。148～153は坏身である。148はたちあがりはやや高く、口縁端部に稜を残している。149・150はたちあがりはやや高いが、端部を丸くおさめている。直径15cm弱で、底部外面に回転ヘラケズリが施されている。150の底部内面には赤色顔料の付着が認められる。151～153はたちあ

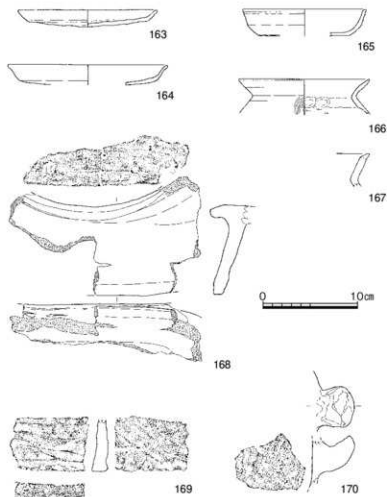


第33図 須恵器 (S=1/4)

がりが低く、端部を丸くおさめるものである。151・152は直径14～15cm弱、153は直径16cm弱とやや大きい、ひずみのせいかもしれない。152の底部外面には赤色顔料の付着が認められる。154は高台付きの坏身である。口径16.4cm、器高5.9cm、高台径12.8cm、高台高0.5cmで、底部外面に回転ヘラケズリが施されている。155・156も同様の坏身の高台部と思われる。157は坏等の蓋と考えられ、復元径12.8cmである。つまみの有無は不明である。158は高坏の脚部である。低脚で脚端部が内傾し、上下に拡張する。159は甕の体部である。復元径10.2cm、4条の沈線を巡らせ、その間に板状工具による押圧文が施される。穿孔の復元径は約1.4cmである。160は口径26.0cmに復元できる甕の口縁部である。口縁部を外側に折り返して肥厚し、端面を作り出している。161は壺の口縁部と思われる。口縁部を若干屈曲させることによって外観上は肥厚したのと同じ視覚的效果を得ようとしたものである。162は甕の口縁部と推定される。内外面にカキメが施されている。

## 土師器 (第34図163～170)

163・164は皿である。橙色～赤褐色を呈するが、丹塗りの痕跡は認められず、暗文も施されていない。163は直径17.0cm、主に回転ナデで成形されているが、底部外面は丁寧なナデられて、ヘラ切りの痕跡が消されている。164は163より径が大きいようで、口縁部を外反させている。165は坏で、口縁部が外側にわずかにつまみ出され、外側に稜がある。166は甕の口縁部である。頭部が「く」の字形に屈曲し、内面に指圧痕とヘラケズリ、外側にはハケメが残っている。167は壺の口縁部である。口縁部のやや外側につまみ出された部分は、粘土紐の貼り付けのようである。口縁部内外面にハケメ、体部内面にヘラケズリが施されている。168・169は移動式竈の破片である。168は掛口と庇を含む部分で、全体に丁寧なナデで仕上げられている。庇に対して低い掛口はやや外側に向かって開いてお

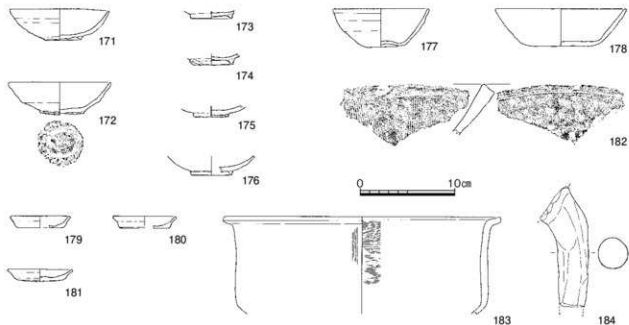


第34図 土師器 (S=1/4)

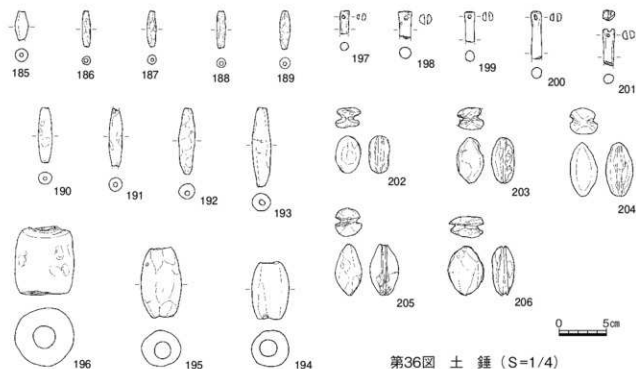
り、内側に径6~8mmほどの竹管状のものを当てた痕跡が複数認められる。169は接地する基底部の破片と推定される。外面には粗いハケメが施され、内側は深くナデられている。170は瓶の把手と推定される。

中世土器 (第35図171~184)

171~176は土師器碗である。171~176が高台を持ち、177は高台を持たない。171は土塚墓2の集石付近から出土したもので、直径10.5cm、高台径4.0cm、器高3.4cmである。172は直径11.0cm、高台径4.7cm、器高3.5cmで外面中央よりやや下に明瞭な稜線を持っている。また、高台はつぶれており、焼成前に初殺のようなものに押しつけられたようである。177は内外面をナデ調整し、底部中央を凹めたもので、直径10.3cm、高さ4.1cmである。178は土師質の坏で、直径13.9cm、高さ4.0cm、内外面は丁寧なナデ調



第35図 中世土器 (S=1/4)



第36図 土 錘 (S=1/4)

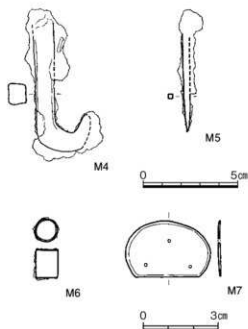
整で仕上げられている。179～181は土師質小皿である。直径6.4～6.7cm、器高1.3cmほどで、口縁部は外側に開き、底部外面にはヘラ切り痕が残っている。182は瓦質の摺鉢である。内面のスリメは全面におよぶものではなく、口縁部外面には2～3条の凹線が巡る。183・184は土師質の鍋である。183は径30cm程に復元でき、体部外面に縦ハケ、体部内面に横ハケが施される。口縁部は外側に屈曲し、端面を持つ。また、胴部と底部の境は比較的明瞭である。184は土師質鍋の脚である。手づくねで整形されている。この他に青磁や白磁等の破片も出土しているが、少量かつ小片であり、掲載は見送った。

#### 土 錘 (第36図185～206)

185～196は管状土錘である。185～189は小型で長さ3～4cm、重量が3～6g程度、185が径1.46cmとやや太いが、他は径約1cmである。190～193は長さ6～9cm、重量が10～30g程度とややばらつきがあるが、中型のものである。194～196は大型で、特に196は300g近いものである。197～201は双孔棒状土錘である。径1cm程度のものばかりで、完形のものはない。201の端面に溝が付けられている。202～206は有溝土錘である。長さ3～4cm、重量20～40gである。平面形は202が楕円形で、その他は紡錘形を呈する。また、202～205は棒状の器具で溝を刻んでいるが、206は鋭利な刃物などで溝を切っているようである。

#### 金属製品 (第37図)

遺構に属さない金属製品として、鉄釘2点、不明銅製品1点、銅製丸軋1点がある。M4は太めの鉄釘と考えられ、曲がった状態で残存長8.1cm、身部断面は1.2cm×1.0cmと太めである。土坑2の埋土上層から出土しており、本来は土坑2の側面に打ち込まれたものが、何らかの理由で遊離したものかもしれない。M5は長さ6.5cm、身部断面は0.3cm×0.3cmと細めの鉄釘である。頭部は錆化が著しく、形態不明である。土壙墓1の埋土から出土したが、棺など痕跡は確認できず、混入品と考えられる。



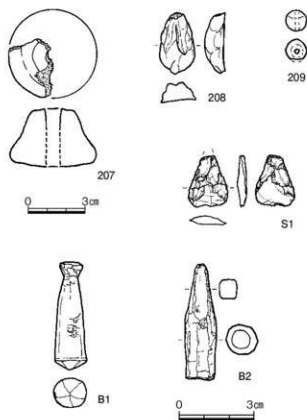
第37図 金属製品 (S=1/2・2/3)

cm、重さ2.11g、長い2本の耳と丸い尾の形状から兎を象っているものとわかるが、顔の部分を欠損している。木型かなにかに粘土を押しつけて成形されており、裏側は凹面になっている。**209**は土製丸玉である。径0.88cm、厚さ0.89cm、孔径0.14cm、重さ0.60gである。黒色を呈し、古墳時代後期に属するものと考えられる。**S1**はサヌカイト製の石鏃である。先端を欠損しており、残存長2.04cm、幅1.60cm、厚さ0.38cm、重さ1.15gである。基部に調整加工のない平基鏃で、風化の度合いや大きさなどから、縄文時代のものとして推定される。**B1・B2**は骨角製品である。どちらも時期、用途は不明、正式な鑑定を行っていないが、鹿角製品ではないかと考えられる。**B1**はトレンチ3の2層から出土しており、長さ4.3cm、径1.35cm、重さ3.97gである。野球のバットを寸詰まりにしたような形状をしている。**B2**は1区包含層から出土した。長さ4.6cm、径1.30cm、重さ4.58g、鉛筆のキャップのような形状をしており、筒状の部分は孔径0.7cm、奥行1.9cmである。細くなった部分の断面は隅丸方形である。類似の製品としては岡山市津島江道遺跡から出土した鐵の骨製根挾がある<sup>(17)</sup>。**B2**の細くなった部分に鐵を挟む切れ

**M6・M7**は銅製品である。**M6**は1区包含層から出土した。長さ1.24cm、径0.98cmのコップ形の銅製品である。内部は砂が詰まっており、観察できない。用途・時期ともに不明である。**M7**は銅製の丸柄裏金具で、トレンチ4の土坑2埋土中から検出された。幅3.39cm、高さ2.23cm、厚さ0.12cm、3か所に径0.13cmの孔が開けられている。古代の遺物と推定される。

## その他の遺物(第38図)

その他の遺物としては紡錘車1点、泥面子?1点、丸玉1点、石鏃1点、骨角器2点を図化した。**207**は土製紡錘車である。全体の4分の1程の破片であるが、広面径4.7cm、狭面径2.1cm、厚さ3.1cm、孔径0.6cmに復元できる。古墳時代後期のものと考えられる<sup>(16)</sup>。**208**は泥面子、あるいはより大きな土師質の土器に取り付けられた装飾のようなものかもしれない。長さ2.45cm、幅1.5cm、厚さ0.8

第38図 その他の遺物  
(207がS=1/2、その他はS=2/3)

込みがないことを除けばよく似ている。B2も鐵の根柢の未製品の可能性がある。包含層中からは他にも多くの獣骨(馬・鹿など)が検出されており、中には切削痕跡のあるものもあるが、時期は不明である。

#### 第4節 まとめにかえて

##### 1 中世の製塩遺構について

塩生遺跡からは、平成5年度の確認調査と令和2年度の調査で中世の製塩に関する遺構が検出された。

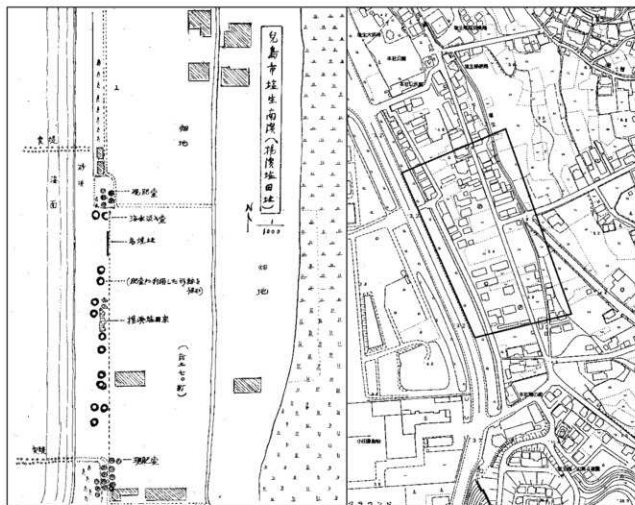
最大径2m前後の円形土坑の壁面に青灰色粘土を貼り付ける土坑1~3は、海水の塩分を濃縮させた鹹水を溜める土坑と考えられる。また、土坑の壁面に山土や灰色粘土を貼り付け、その表面が熱を受けて硬化している炉状遺構1~3は鹹水を火力で煮詰めるために使用された炉跡であろう<sup>(12・13)</sup>。これらの遺構は一連の工程で使用された可能性が高いと思われる。炉状遺構3の構築年代は、埋葬人骨の炭素14年代測定で13世紀代と示された土壌墓1・2よりも層位的に新しい。土坑2では、埋土の最下層から14世紀代に比定される土師器椀(177)が出土している。これらのことから、いまのところ採集年代は14世紀頃と推定される。

中世における見島の塩業資料は、東大寺文書「兵庫北関入船納帳」の文安二年(1445)に兵庫北関を通過した瀬戸内塩約十萬七千石のうち見島塩が一萬二千石を占めることが知られるくらいで、実際にどのような方法で製塩が行われたのかを知る資料はない。しかし、当時の瀬戸内海沿岸や島嶼部では揚浜式塩田による製塩が一般的であり、中世塩生遺跡でもこの製塩法が想定される。揚浜式製塩は、海面より高いところに細砂を敷き、その上に海水を撒いて太陽熱と潮風による水分の蒸発を待ち、塩の結晶の付いた砂(鹹砂)を集めて採鹹土坑(沼井)の中に入れ、海水を注いで塩分を溶出させて鹹水を採取する方法である。塩田の地盤として粘土層を築き海水の透過を防ぐことも行われた。

今回報告する土坑は砂州のほぼ中央に位置し、炉跡にも近接していることから潮汐の影響を受けない場所を選んで築いたものといえる。波が寄せる汀からは推定で50mくらいは離れていると思われる。鹹水をどこでどうやって採取したかが問題となる。

ところで、遺跡一帯がまだ砂浜海岸だった昭和30年頃、台風の大波に洗われて粘土貼り土坑群が露出し、汀に近い場所に製塩遺構が存在したことが知られた<sup>(18)</sup>。そのようなすは旧見島高等学校の日本史の教師で、歴史研究部顧問の藤原音五郎氏により記録され、遺構配置図が作成された。その関係資料を当時の歴史研究部員で、総社市埋蔵文化財学習の館 前館長の村上幸雄氏より寄贈いただいたので紹介したい。

寄贈された資料は、A5サイズの手書きの地図「見島市塩生塩田址 1/15000」、B5サイズの手書きの配置図「見島市塩生南濱(揚浜塩田址) 1/1000」(第39図)とその元データである「メモ書き」、写真12枚とそのネガフィルムなどである。粘土貼り土坑は採鹹用とみて「海水汲入壺」と記され、全部で13基描かれている。海岸線に沿って南北に延びる砂州の西裾に並んで配列されているように見えるが、東側にも遺構が埋没している可能性を含みおくべきであろう。「メモ書き」では土坑の外径(最大1.94m、最小1.23m)、内径(最大1.49m、最小1.13m)、粘土の厚みに加えて遺構間の距離が



第39図 塩生遺跡遺構配置図(左)と推定位置図(右)(S=1/5,000)

記される。その距離を合計すると北端から南端までの長さは約90mとなる。北端西側の1基は内部を発掘していることが写真資料(第40図)でわかる。その深さ1.32~0.45m(底の凹凸を示すものであろう。内部に堆積物か)、周囲5.22mを測り、海岸線からの距離10.5m、東側道路からの距離54.5mとある。南端のものは石灰で固め、内部は砂で埋もれる。肥壺に転用されているものがある。「揚浜塩田床」の説明はないが、揚浜塩田址を示す遺構であろう。「瓦焼跡」は現代のもので、古老からの聞き取りを記したものだ。配置図に示された構造物のうち現存するのは北側に記された墓地だけである(「享和元年酉年」など墓石の記銘が一致)。以上が旧児島高等学校歴史研究部による調査記録の概略である。今あらためてみると、これらの土坑群は材質や構造が今回調査した鹹水溜土坑と共通していると思われ、中世の揚浜式塩田において採鹹土坑として使用されたものと考えられる。

塩生遺跡において、汀に近い採鹹土坑と、砂洲上にある鹹水溜土坑といった装置が同時に関連をもって使用されたと仮定すれば、以下のような製塩作業を想定することが可能ではなかろうか。

まず当時の砂浜は、写真撮影された昭和30年頃よりも広くて傾斜が緩やかであったかもしれない<sup>(9)</sup>。塩田の作業では、満潮時に海水を汲み上げて砂の上に撒き、時を置いて鹹砂を集め採鹹土坑の中に入れ、海水を注いで塩分を溶出させる。得られた鹹水は砂洲上の鹹水溜土坑まで運ばれ、次の工程(例えば、土坑1、2の埋土に花崗岩礫が多く含まれることから焼石投入による塩分濃縮、未発見の装置



第40図 旧児島高等学校歴史研究部による塩生遺跡の調査

によるろ過処理など)を経て貯蔵され、その上澄みを汲み取り、炉で煮詰める作業に移ることが想像できる。一方、浜では採鹹土坑の中から塩分の抜けた砂を掻き揚げて塩田に戻して均し、次の満潮に備えるのである。

以上、塩生遺跡で調査された中世の製塩遺構について憶測を交えて述べてきた。今後、塩田などの遺構確認や詳細な遺構分布状況が把握されることを期待したい。(小野)

## 2 鈿帯

平成5年度調査のトレンチ4からは古代の腰帯具<sup>200</sup> 1点(M7)が出土している。楕円形の一部を長軸に平行してまっすぐ切り取ったような形状で、3個の小孔を持つ銅製の丸衿裏金具である。古代の官人は身分の象徴として革製の帯に銅鈿や石鈿を綴っていたが、裏金具は銅鈿や石鈿と帯を挟んだ裏側に当たった金具である。

先行研究では、とくに銅鈿を含む銅製腰帯具についてその大小が律令制における位階を反映しているとの意見がある。佐藤興治や阿部義平らは平城京出土遺物や正倉院伝来品の分析から、銅製腰帯具の大小が六位以下の官人の位階に対応しているとしている<sup>201</sup>。これに対して亀田 博は遺跡出土巡方の縦横の数値分布を示し、そこに明確な段階差は存在しないとし、さらに遺跡からの出土状況などを



照らし合わせて、腰帯具のサイズと位階との対応を否定している<sup>(22)</sup>。後続の研究においても結論は出ていないが、腰帯具が古代の官人層を象徴する遺物の一つであることは間違いない<sup>(23)</sup>。

こうした腰帯具は岡山県内では31遺跡から71点出土しているのを確認できた(表1)。特に市内酒津の山腹からは石鈿30点がまとまって出土したとされ、古くから注目されてきた<sup>(24)</sup>。塩生遺跡の例はこれに続くものである。ただ、まとまって出土している酒津の例は例外的で、どの遺跡からも1点のみの出土が多い。天神河原遺跡や津寺遺跡のように複数の腰帯具が出土していても、異なる遺構からの出土であったり、距離をおいた包含層からの検出であったりと、完帯としてまとまった出土状況を示すものはない<sup>(25)</sup>。塩生遺跡の丸柄裏金具も1点のみの出土である。

次に腰帯具を出土した県内の遺跡の性格を見てみたい<sup>(26)</sup>。美作国府跡や国長遺跡・天神河原遺跡、金井戸遺跡等は美作・備前・備中の各国府やその関連遺跡と推定されている。宮尾遺跡(久米郡衛比定地)、平遺跡(勝田郡衛比定地である勝間田遺跡の北側に立地)、百間川米田遺跡(備前国津あるいは上道郡津に比定)、津寺遺跡(都宇郡衛)などは郡衛や重要な港湾関係遺跡に比定されている。

一方、酒津の例は、石囲いの中から出土したとされるので、おそらく小型の石室等、墳墓からの出土と考えられる。酒津と同様の墳墓遺跡からの出土と考えられる例は、火葬墓と考えられる石囲いから検出された金黒池東遺跡、火葬墓群周辺から出土した吉備津杉尾西遺跡が挙げられる。

官衛や港津などの公的施設や墳墓以外の遺跡としては、祭祀遺跡である大飛鳥遺跡<sup>(27)</sup>がある。笠岡市の沖、瀬戸内海の中央に浮かぶ大飛鳥の東岸から延びた砂洲の基部に位置している。砂洲の基部には巨岩群があり、そこから奈良から平安時代にかけての、多量の奈良三彩、唐花文六花鏡・狻猊及鸞八花鏡等の鏡、腰帯具、皇朝十二銭、須恵器、手捏ね土器等が出土している。遺跡の存続期間が遣唐使が派遣された時期と重なっており、出土遺物に優品が多いことから、海上交通に関する国家的祭祀が行われた遺跡と考えられている。

以上のように岡山県下の腰帯具出土遺跡は、国府や郡衛、津等の官衛的遺跡とその周辺・墳墓・祭祀遺跡に分けることができる。塩生遺跡は児島郡内でも西に偏った児島の西岸に位置しており、児島郡衛に比定されている児島北岸の岡山市南区郡からは距離が離れている。また、砂洲上という立地から墳墓というの考えにくい<sup>(28)</sup>。ここで、塩生遺跡の南に目を向けると、それほど遠くない香川県の大浦浜遺跡と羽佐鳥遺跡からも鈿帯が出土している。特に大浦浜遺跡は浜辺に立地する遺跡であり、鈿帯とともに皇朝十二銭等が出土しており、製塩や漁撈といった生産にかかわる祭祀が行われていた可能性が指摘されている<sup>(29)</sup>。砂洲や浜辺といった海浜部という立地の共通点を考慮すれば、大飛鳥遺跡や大浦浜遺跡と同様の祭祀関連の可能性を考えるのが妥当かもしれない。この場合、児島西岸の海上交通、あるいは古墳時代から続く製塩との関連が想起される。しかし、大飛鳥遺跡と大浦浜遺跡では三彩や皇朝十二銭などの祭祀遺物が出土しているの対し、塩生遺跡からそれらは見つかっていない。

単独出土は腰帯具の全般的傾向とはいえ、検討材料の少なさは否めない。塩生遺跡を祭祀遺跡、丸柄裏金具を祭祀関連遺物と断定するのは短絡的に過ぎるであろう。ただ、塩生遺跡、大浦浜遺跡、羽佐鳥遺跡と比較的近在の遺跡で腰帯具が出土していることは注意すべきであり、海上交通や生業といった分野に対する官人層のなんらかの関与を伺うことはできる。いずれにしても塩生遺跡の丸柄裏

番号	旧国	遺跡名	所在地	遺構等	種別	材質	数量	参考文献
1	美作	美作国府跡	津山市山北	包含層	丸鞘	石	1	1
2		美作国分寺	津山市国分寺	中世整地土層	葦方	蛇紋岩	1	2
3		二宮遺跡	津山市二宮		丸鞘	石	1	3
4		久米塚寺	津山市宮尾		丸鞘	粘板岩	1	4
5		領家遺跡	津山市領家	包含層	丸鞘	粘板岩	1	5
6		法事功遺跡	津山市久米川南	溝	丸鞘	蛇紋岩	1	6
7		尾崎遺跡	美作市古町	中世柱穴	葦方	粘板岩	1	7
8		平遺跡	勝田郡勝央町平		丸鞘	石	1	3
9		下市瀬遺跡	真庭市下市瀬	井戸	葦方	鋼	1	8
10		国民遺跡	岡山市中区高島新屋敷	包含層	丸鞘	石	1	9
11	天神河原遺跡	岡山市中区 高島新屋敷・中井	土壇	葦方	鋼	1		
			溝	丸鞘	鋼	1		
12	赤田東遺跡	岡山市中区赤田	包含層	鈍尾	鋼	1	10	
備前	百間川米田遺跡	岡山市中区米田	近世土壇	葦方	サスカイト	1	11	
			溝	葦方	蛇紋岩	1	12	
			溝	丸鞘	鋼	1	13	
			溝	葦方	蛇紋岩	1	14	
			井戸	葦方	石	1	15	
16	鹿田遺跡	岡山市北区鹿田	包含層	丸鞘	粘板岩	1	16	
17	北方長田遺跡	岡山市北区三野1丁目	土坑	丸鞘	安山岩	1	17	
18	斎富遺跡	赤磐市斎富		丸鞘	蛇紋岩	1	18	
19	用水1号墳	赤磐市河本	墳墓?	葦方	鋼	1	19	
20	大土井山	瀬戸内市邑久町本庄		葦方	ホルンフェルス?	1	20	
21	戴治谷美山山頂	瀬戸内市邑久町福谷		葦方	流紋岩	1		
22	塩生遺跡	倉敷市児島塩生	中世遺構埋土	丸鞘裏金具	鋼	1	本書	
23	横見1号墳	新見市横見	横穴式石室内	葦方	流紋岩	1	21	
24	金井戸遺跡	総社市金井戸	包含層	丸鞘	石英脈	1	22	
25	金黒池東遺跡	総社市福井	石囲い	葦方	鋼	2	23	
26	高塚遺跡	岡山市北区高塚	柱穴	葦方	鋼	1	24	
27	津寺遺跡	岡山市北区津寺	包含層	葦方	鋼	1	25	
				丸鞘	鋼	1		
				鈍尾	鋼	1		
28	吉備津杉尾西遺跡	岡山市北区吉備津	流土中(墳墓)	葦方	滑石	1	27	
				丸鞘	滑石	1		
29	川入・中撫川遺跡	岡山市北区川入・中撫川	包含層	建物	葦方	石	1	28
				葦方	葦方	石	1	
30	酒津	倉敷市酒津	石囲い	葦方	大理石	19	29	
				葦方	頁岩	5		
				丸鞘	大理石	3		
				丸鞘	頁岩	1		
				山形葦方	大理石	1		
31	大飛鳥遺跡	笠岡市飛鳥	祭祀遺跡	葦方	鋼	2	30	
				葦方	石	1		

表1 岡山県内の腰帯具出土遺跡

金具は遺跡の性格を考える上で重要な遺物であり、地方の遺跡から出土する腰帯具の意味付けを含めて今後の研究の進展を待ちたい。(藤原)

### 3 土壇墓2とその遺物

1区における土壇墓1・2の検出については、調査前には全く予想していなかった。土壇墓2の上方

で検出した集石遺構についても、比較的浅いところで検出され、精査しても墓塚などが検出できなかったことから、耕作の邪魔になる礫を集めたものと考えていた。ただ、周辺の掘り下げ中に完形の土師器碗(171)を含む中世土器が多く検出されていたこともあり、念のため写真実測できるだけの撮影を行っていたことは幸いであった。

2基の土塚墓は、化学分析(付編参照)によって13世紀代の年代が示され、海洋生物を摂取していた可能性が指摘されている。なお、海洋生物の摂取に起因する海洋リザーバー効果の影響によって、本来よりも年代が遡っている可能性も指摘されているが、集石周辺から出土した土師器碗(171)の年代は13世紀末であり、ほぼ整合するものと考えてよいだろう<sup>190)</sup>。

注目すべきは、土塚墓2から出土したイソガネと推定される鉄器(M3)と副葬品の可能性がある飯蛸壺(1)である。鉄器(M3)については出土時には刀子、除錆後は鉤を想定したが、刀子とは形態が全く異なり、鉤とすると刃部に鋭利さが認められないことから、他の候補を探したところ、イソガネに行き着いた。イソガネとは「アワビをはじめとする磯物(サザエ・トコブシ・ウニ・タコなど)などの捕採に用いる鉄製のヘラまたはカギ状の道具の総称」であり、特にアマが潜水作業でアワビなどの貝類を岩から剥がすために用いる鉄製ヘラのこととされる<sup>191)</sup>。近代の漁撈具を集めた「日本水産捕採誌(復刻版)」<sup>192)</sup>などを見ると、概して先端がカーブあるいは屈曲して、岩に貼り付いた貝類を剥がしやすい形状となっている。中でも肥後国(熊本県)の例(第41図)が、本遺跡の鉄器(M3)に



第41図 肥後国のイソガネ  
(註32文献より)

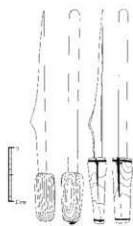
最も類似している。「長さ6寸4分許其先き2寸7分許は上に反らし、元の方は幅1寸厚さ3分5厘許先きに至て殺ぐ」とあり、細部の寸法・形状等に違いはあるが、長さや幅などは鉄器(M3)と近いものである。また、先端の片側がすり減ったように引込んでいることについては、使用による摩耗ではなく、最大幅の部分を凸状に張り出させるための形状と考えられる<sup>193)</sup>。これはアワビを剥がしやすくする工夫で、類似の張り出しを供えたイソガネは、徳島県の民俗例(第42図)に認められる<sup>194)</sup>。

塩生遺跡から出土した貝類としては、アカニシが比較的目につき、アサリ・カキなども含まれるが、アワビやサザエなどは認められない。また、現在岡山県では商業ベースでのアワビの漁獲はないが、息息は確認されているようである<sup>195)</sup>。塩生地区の海岸部は埋め立てが進んでいるが、沖にある高島の周開や南方の宮の鼻周辺には岩礁があり、これらの貝類が息息する漁場となっていたのであろう。

飯蛸壺(1)については、副葬品と混入品とで意見がわかる遺物である。副葬品の可能性を示す根拠として、完形で出土したことが挙げられる。本報告の調査では他にも飯蛸壺が出土しているが、数も少なく、全て破片である。さらに事実記載に記したとおり未使用品である可能性がある。完形でしかも未使用の飯蛸壺が土塚墓の埋土、しかも床面近くにたまたま混入した可能性もなくはないが、イ

最も類似している。「長さ6寸4分許其先き2寸7分許は上に反らし、元の方は幅1寸厚さ3分5厘許先きに至て殺ぐ」とあり、細部の寸法・形状等に違いはあるが、長さや幅などは鉄器(M3)

と近いものである。ま



第42図 徳島県のイソガネ  
(註34文献より)

ソガネと同様に副葬品として置かれたことは十分に考えられる。飯蛸壺は弥生時代以降において瀬戸内沿岸の多くの遺跡から出土しており珍しいものではないが、墳墓の副葬品となると古墳時代のものしか確認できなかった。兵庫県南あわじ市の沖ノ島古墳群から釣針や軽石製の浮子などともに出土している<sup>(36)</sup>。土塚墓2の例とは時代が大きく異なるが、飯蛸壺が副葬品たり得る事例として取り上げておく。

鉄器(M3)がイソガネであり、飯蛸壺(1)が副葬品であるとなると、土塚墓2の主は13世紀末にこの付近で漁撈を生業としていた人物と考えることができ、鎌倉時代の漁撈及び漁撈民の葬送儀礼を考える上で貴重な資料と言える。ただイソガネについて、現状では民俗資料からの類推によるところが大きく、今後は同時代資料の探査や史・資料などから系譜関係を探っていくことが必要となる。また、人骨の性別、年齢など人類学的分析ができておらず、不十分な報告となっている。今後の課題とした。

(藤原)

## 註

- (1) 間壁忠彦「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報 第2号』(財)倉敷考古館 1966
- (2) 泉 拓良・松井 章「福田貝塚資料 山内清男考古資料2」奈良国立文化財研究所史料 第32冊 奈良国立文化財研究所 1989
- (3) 間壁忠彦・間壁良子・小野一臣・藤田憲司「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報 第14号』1979
- (4) 小野雅明「第3章 溝落遺跡」『朝原寺跡2 溝落遺跡』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第15集 2013
- (5) 間壁忠彦・間壁良子「第四章 弥生時代 第一節 弥生時代の遺跡」『新修倉敷市史 第一巻 考古』倉敷市 1996
- (6) 多和和彦「児島市宇頭間の古墳群について」『吉備考古 第85号』吉備考古学会 1957
- (7) 間壁忠彦・間壁良子・小野一臣・藤田憲司「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報 第14号』1979
- (8) 間壁忠彦・間壁良子「第八章 奈良時代以降の遺跡 第四節 生産遺跡と物の流通」『新修倉敷市史 第一巻 考古』倉敷市 1996
- (9) 畑 和良「本太城主「能勢修理」のこと」『倉敷の歴史 第26号』倉敷市 2016
- (10) 倉敷市歴史年表編集委員会「倉敷市歴史年表」倉敷市教育委員会 1978
- (11) 小野雅明「塩生遺跡発掘調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報1』倉敷埋蔵文化財センター 1994
- (12) 福田正継「沖須賀遺跡」玉野市埋蔵文化財発掘調査報告(2) 玉野市教育委員会 1981
- (13) 大山真充・真鍋昌宏「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V』香川県教育委員会 1988
- (14) 人骨出土状況のオルソ画像作成にあたっては岡山県古代吉備文化財センターのお世話になった。
- (15) 腰の集まりを検出した段階で周囲の精査を行ったが、墓壇などの痕跡を確認することができなかった。このため、人骨を検出するまで埋葬に関する集石であると認識できなかった。
- (16) 園 奈歩「集落から出土する弥生～古墳時代の紡錘車についてー岡山県の事例からー」『紀要 第2号』岡山県古代吉備文化財センター 2022
- (17) 草原孝典「津島江道(給食棟・南棟校舎)遺跡」岡山市教育委員会 2011
- (18) 多和和彦「児島産業史の研究」児島の歴史第1巻 児島の歴史刊行会 1959
- (19) 水島漣を西に渡って対岸に位置する倉敷市玉島黒崎の沙美海岸では、潮流の変化や台風による高波などの影響を受け海岸侵食が起こったため、人工浜浜工事が行われた。
- (20) 古代の帯やその付属具に関する用語については、未統一な部分が多い。ここでは付属具全体を「腰帯具」、銅製の鈎を「銅鈎」、慣用的に「石帯」と呼ばれている石製の鈎を「石鈎」と呼称する。奈良文化財研究所「鈎帯をめぐる諸問題」2002
- (21) 佐藤典治「考察 金属器」『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所 1976
- (22) 阿部義平「鈎帯と官制制について」『東北考古学の諸問題』東出版事業社 1976
- (23) 亀田 博「鈎帯と石帯・出土鈎・石鈎の研究ノート」『関西大学考古学研究室開設参周年記念 考古学論叢』関西大学 1983
- (24) 奈良文化財研究所「鈎帯をめぐる諸問題」2002
- (25) 鎌木義昌「岡山の古墳」岡山文庫4 日本文教出版株式会社 1964
- (26) 脇本 裕「倉敷市酒津山出土の石帯」『倉敷考古館研究集報 第16号』(財)倉敷考古館 1981

- (25) 腰帯具1点のみ出土する遺跡・遺構が多いのは全国的な傾向で、田中広明は「1個だけを何らかの象徴として持っていた可能性がある」とする。註(23)文献
- (26) 岡田 博は岡山県内の腰帯具の多くが官衙関連遺跡の周縁部で出土することを指摘している。  
岡田 博「34.官衙」「吉備の考古学的研究(下)」(株)山陽新聞社 1992
- (27) 遺跡の名称は「大飛鳥洲の南遺跡」となっており、立地も正確には砂嘴の付け根である。
- (28) 少なくとも岡山県内では古代の墓地在砂洲や砂浜に営まれた例を確認できない。ただ、山口県萩市の見島鳥居コンゴ古墳群などの例もあり、全く否定することもできない。
- (29) 大山真充「香川・大浦浜遺跡の国家的祭祀について」「考古学と古代史」同志社大学考古学シリーズⅠ 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1982
- (30) 福田正継・武田恭彰・橋本和久「8.山陽東部」「概説 中世の土器・陶磁器」(有)真福社 1995
- (31) 日本民具学会「日本民具事典」1997
- (32) 農商務省水産局編纂「日本水産捕採誌(復刻版)」岩崎美術社 1983  
渡辺直哉「漁具・漁法から見た伝統の持続性と質的変容の研究-イソガネとヘラ状骨角器、裸潜水漁の系譜を探る-」[民具研究 第133号]日本民具学会 2006
- (33) イソガネの類例・使用法と参考文献などについては、瀬川 涉氏(横須賀市自然・人文博物館)にご教示いただいた。
- (34) 森本嘉訓「カツギ漁具」[「中四国民具4」]中四国民具学会 1983  
森本嘉訓「漁村の鍛冶屋」[「中四国民具5」]中四国民具学会 1985
- (35) 食文化研究家の岡嶋隆司氏にご教示いただいた。
- (36) 兵庫県南あわじ市の沖ノ島古墳群から出土している。埋蔵文化財研究会「海の生産用具-弥生時代から平安時代まで 資料集2」埋蔵文化財研究会第19回研究会 1986

## 参考文献

- 廣山克道「日本製塩技術史の研究」雄山閣出版 1983  
角田直一「児島塩業のあゆみ」[「児島風土記」倉敷の自然をまもる会 1982

## 表1 参考文献

- (1) 小林利晴ほか「美作国府跡・小田中遺跡・山北遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告228  
岡山県教育委員会 2011
- (2) 澁 哲夫ほか「美作国分寺跡発掘調査報告」津山市教育委員会 1980
- (3) 高畑知ほか「二宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28 岡山県教育委員会 1979
- (4) 河本 清ほか「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査(補遺編)」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24  
岡山県教育委員会 1978
- (5) 岡田 博ほか「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8  
岡山県教育委員会 1975
- (6) 村上幸雄ほか「鞍山遺跡群Ⅰ」久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979
- (7) 上橋 武ほか「八幡山遺跡 八幡山南遺跡 八幡山門明寺跡 尾崎遺跡 中町B遺跡 穴が遺跡 穴が遺古墳 今岡D遺跡 今岡中山遺跡 今岡古墳群 岡岡遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213 岡山県教育委員会 2008
- (8) 橋本悠司ほか「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3  
岡山県教育委員会 1973
- (9) 高田恭一郎ほか「中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告221  
岡山県教育委員会 2009
- (10) 草原孝典ほか「赤田東遺跡」岡山市教育委員会 2005
- (11) 物部茂樹ほか「百間川米田遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 岡山県教育委員会 2002
- (12) 岡本寛久ほか「百間川米田遺跡(旧当麻遺跡)3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74 岡山県教育委員会 1989
- (13) 井上 弘ほか「百間川当麻遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52 岡山県教育委員会 1982
- (14) 柳瀬昭彦ほか「百間川原尾島遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 岡山県教育委員会 1996
- (15) 江見正己ほか「百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59  
岡山県教育委員会 1985
- (16) 山本悦世ほか「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊  
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1990

- (17) 草原孝典「北方長田遺跡」岡山市教育委員会 2020
- (18) 下澤公明ほか「齋宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105 岡山県教育委員会1996
- (19) 神原英朗ほか「用木古墳群」岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(1) 山陽町教育委員会 1975
- (20) 河本 清ほか「邑久町史 考古編」瀬戸内市 2006
- (21) 下澤公明ほか「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査9」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15 岡山県教育委員会 1977
- (22) 渡邊恵里子ほか「総社遺跡 金井戸遺跡 北溝手遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告209 岡山県教育委員会 2007
- (23) 伊藤 晃ほか「藪田古墳群 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡・中山古墳群 西山遺跡・西山古墳群 服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 岡山県教育委員会1997
- (24) 江見正己ほか「高塚遺跡 三手遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 岡山県教育委員会2000
- (25) 亀山行雄ほか「津寺遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 岡山県教育委員会 1997
- (26) 正岡睦夫ほか「山陽自動車道建設に伴う発掘調査9」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90 岡山県教育委員会 1994
- (27) 柴田秀樹ほか「吉備津杉尾西遺跡・吉備津奥田遺跡」岡山市教育委員会 2010
- (28) 草原孝典「川入・中撫川遺跡」岡山市教育委員会 2006
- (29) 鎌木義昌「岡山の古墳」岡山文庫4 日本文教出版株式会社 1964  
臨本 裕「倉敷市酒津山出土の石帯」「倉敷考古館研究集報 第16号」(財)倉敷考古館 1981
- (30) 鎌木義昌「225 大飛鳥遺跡」「岡山県史 第十八巻 考古資料」岡山県 1986

## 出土遺物観察表

## 1 土器観察表(製塩土器以外)

番号	種別	器種	出土位置 層位	法量 (cm)	技法上の特徴	色 調 (上段:外側/ 下段:内面)	残存	備 考	整理 番号
2	縄文土器	深鉢	トレンチ1 6層		胴部外面ケズリ・内面ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 褐色 10YR4/1			
3	縄文土器	深鉢	トレンチ1 6層		胴部内外面ナデ	にぶい黄褐色 10Y16/4 にぶい黄褐色 10YR7/4			
4	弥生土器	甕	トレンチ3 4層	口径 15.3 直径 190 器高 -	口縁部内外面はタタキ後ナデ 体部外面にハケメ後ナデ 体部外面下方にタタキ後ナデ 胴部内面に指圧痕 体部内面にハケメ後ナデ	褐色 7.5YR4/1 灰黄色 2.5Y6/2	1/8	贈入土器	H5-30
146	須恵器	坏蓋	1区 包含層	直径 147 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ 天井部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ・ロクロは右回り	灰色 N4/ 灰色 N5/	1/3		R2-1
147	須恵器	坏蓋	トレンチ3 2層	直径 150 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ・ロクロは左回り	灰色 N6/ 灰色 N6/	1/3		H5-17
148	須恵器	坏身	トレンチ4 5層	口径 127 直径 149 器高 -	回転ナデ ロクロは右回り	灰色 5Y5/1 灰色 5Y5/1	1/7		H5-18
149	須恵器	坏身	1区 包含層	口径 124 直径 149 器高 -	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ? その他は回転ナデ	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	1/6		R2-25
150	須恵器	坏身	1区 包含層	口径 120 直径 148 器高 5.9	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ・ロクロは右回り	灰色 N4/ 灰色 N5/	2/3	底部内面に 赤色顔料付着	R2-3
151	須恵器	坏身	1区 包含層	口径 120 直径 147 器高 -	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ・ロクロは右回り	灰色 N5/ 灰白色 N7/	1/2		R2-4
152	須恵器	坏身	トレンチ3 2層	口径 121 直径 140 器高 4.5	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ・ロクロは左回り	灰白色 7.5Y7/1 灰白色 5Y7/1	5/6	底部外面に 赤色顔料付着	H5-16
153	須恵器	坏身	1区 包含層	口径 138 直径 158 器高 4.3	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に粘土巻き上げ痕跡 その他は回転ナデ・ロクロは左回り	灰色 5Y6/1 灰白色 7.5Y7/1	1/4		R2-26
154	須恵器	坏身 (有台)	1区 包含層	口径 164 高台径 128 器高 5.9	底部外面は回転ヘラケズリ 底部内面に仕上げナデ その他は回転ナデ・ロクロは右回り	灰色 N5/ 灰色 N5/	1/2		R2-27
155	須恵器	高台	トレンチ2 土坑1	口径 - 高台径 120 器高 -	底部外面に仕上げナデ? その他は回転ナデ・ロクロは右回り	灰色 N4/ 青灰色 5PB5/1	1/6		H5-20
156	須恵器	高台	トレンチ4 5層	口径 - 高台径 11.7 器高 -	回転ナデ	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	1/8		H5-19
157	須恵器	蓋	トレンチ4 5層	径 128 器高 -	天井部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ・ロクロは右回り	灰白色 10Y7/1 灰色 10Y6/1	1/6		H5-24
158	須恵器	高坏 (脚)	トレンチ4 5層	口径 - 脚径 10.2 器高 -	回転ナデ	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	1/6		H5-21
159	須恵器	甕	1区 土坑3	口径 10.2 孔径 1.4 器高 -	底部外面は回転ヘラケズリ その他は回転ナデ	灰色 N5/ 灰色 N5/	1/3		R2-28
160	須恵器	甕	1区 包含層	口径 26.0 胴部径 18.4 器高 -	回転ナデ ロクロは右回り	暗灰色 N3/ 暗灰色 N3/	1/6		R2-2
161	須恵器	壺	1区 包含層	口径 - 直径 - 器高 -	口縁部内面・外面に回転ナデ 胴部は内面・外面にカキメ	灰色 5Y5/1 灰色 5Y5/1			R2-31
162	須恵器	瓶	1区 包含層	直径 - 器高 -	口縁端面に回転ナデ 外面にカキメ・内面はカキメ後ナデ	灰オリーブ色 5Y6/2 灰白色 7Y7/1			R2-30

番号	種別	器種	出土位置 層位	法量 (cm)	技法上の特徴	色調 (上段：外面/ 下段：内面)	残存	備考	整理 番号
163	土師器	皿	トレンチ4 10層	直径 148 器高 1.8	底部外面はナデ 底部内面は回転ナデ後指押え その他は回転ナデ・ロクロは左回り	にぶい・褐色 5YR6/4 にぶい・赤褐色 5YR5/4	1/2		H5-29
164	土師器	皿	1区 包含層	直径 170 器高 2.1	底部外面はナデ その他は回転ナデ・ロクロは左回り	褐色 5YR6/6 明赤褐色 5YR5/6	1/6		R2-17
165	土師器	坏	1区 包含層	直径 132 器高 2.8	底部外面はナデ その他は回転ナデ・ロクロは左回り	褐色 7.5YR7/6 褐色 5YR6/6	1/8		R2-18
166	土師器	甕	トレンチ7 包含層	口径 140 直径 - 器高 -	口縁部内外面は横ナデ 体部外面はハケメ後ナデ 胴部内面に指圧痕 体部内面にヘラケズリ	にぶい・黄褐色 10YR8/4 にぶい・黄褐色 10YR6/4	1/4		H5-33
167	土師器	壺	2区 土器溜まり	口径 - 直径 - 器高 -	口縁部内外面はハケメ 体部内面にヘラケズリ	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい・赤褐色 5YR5/4	-		R2-32
168	土師器	甕	トレンチ2 土坑1	掛口径 - 基底径 - 器高 -	横ナデ	にぶい・褐色 5YR6/4	-		H5-31
169	土師器	甕	トレンチ2 土坑1	掛口径 - 基底径 - 器高 -	内面は横ナデ・基底部端面はナデ 外面下部部に指圧痕 外面のその他はハケメ	明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6	-		H5-32
170	土師器	瓶(把手)	1区 包含層	直径 - 器高 -	外面はナデ 内面は軽いハケメ	浅黄褐色 10YR8/3 にぶい・黄褐色 10YR7/3	-		R2-30
171	中世土器	椀	1区 包含層	直径 105 高台径 4.0 器高 3.4	内外面は横ナデ 高台は貼り付け	灰白色 10YR8/2 灰白色 10YR8/2	1		R2-5
172	中世土器	椀	1区 包含層	直径 110 高台径 4.7 器高 3.5	内外面は横ナデ 高台は貼り付け・標圧痕	灰白色 2.5Y8/1 灰白色 2.5Y8/1	1/2		R2-19
173	中世土器	椀	1区 土壇基1	直径 - 高台径 4.4 器高 -	内外面は横ナデ 高台は貼り付け	淡黄色 2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y8/3	-		R2-21
174	中世土器	椀	1区 包含層	直径 - 高台径 4.8 器高 -	内外面は横ナデ 高台は貼り付け	灰白色 10YR8/1 灰白色 10YR8/2	-		R2-23
175	中世土器	椀	1区 包含層	直径 - 高台径 3.8 器高 -	内外面は横ナデ 高台は貼り付け	淡黄色 2.5Y8/3 淡黄色 2.5Y8/3	-		R2-22
176	中世土器	椀	1区 包含層	直径 - 高台径 4.4 器高 -	内外面は横ナデ 高台は貼り付け	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	-		R2-24
177	中世土器	椀	トレンチ4 土坑2 8層	直径 103 器高 4.1	内外面はナデ 底部外面に指圧痕	浅黄褐色 10YR8/3 灰白色 10YR8/2	2/3		H5-26
178	中世土器	坏	トレンチ4 5層	直径 139 器高 4.0	底部外面はナデ 底部内面は指押え後ナデ その他は回転ナデ・ロクロは右回り	にぶい・黄褐色 10YR6/3 にぶい・黄褐色 10YR6/4	1/6		H5-27
179	中世土器	小皿	1区 包含層	直径 6.4 器高 1.25	底部外面はヘラ切り その他は回転ナデ・ロクロは左回り	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	1/6		R2-16
180	中世土器	小皿	1区 包含層	直径 6.7 器高 1.3	底部外面はヘラ切り その他は回転ナデ・ロクロは左回り	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 10YR8/3	1/4		R2-15
181	中世土器	小皿	トレンチ1 4層	直径 6.9 器高 1.3	底部外面に工具痕 その他は回転ナデ・ロクロは不明	褐色 2.5YR6/6 褐色 5YR7/6	1/6		H5-25
182	中世土器	擦鉢	トレンチ4 5層	直径 - 器高 -	外面は回転ナデ後指押え 口縁部は回転ナデ・内面にカキメ	黒色 N2/ 灰白色 N7/	-		H5-28
183	中世土器	土鍋	1区 包含層	直径 292 器高 -	底部内外面にナデ 体部外面は縦ハケとナデ 体部内面は横ハケとナデ 口縁部は横ナデ	暗灰黄色 2.5Y5/2 にぶい・黄褐色 10YR5/3	1/4		R2-29
184	中世土器	土鍋(脚)	1区 包含層	直径 - 器高 -	外面にナデと指押え	黄褐色 2.5Y5/3	-		R2-33



## 2 製塩土器観察表

番号	時代	出土位置	層位	技法上の特徴	色調(上段:外面/下段:内面)
5	弥生	トレンチ4	5層	脚部外面押圧・内面指ナデ	にぶい赤褐色 5YR5/4 にぶい赤褐色 5YR5/4
6	古墳	トレンチ4	5層	脚部外面押圧・内面ナデ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4
7	古墳	トレンチ5	5層	外面平行タタキ、内面指押さえ	にぶい褐色 7.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR5/3
8	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 10YR7/3 にぶい褐色 10YR7/3
9	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい褐色 5YR6/3
10	古墳	トレンチ3	2包含層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR7/4 にぶい褐色 5YR6/4
11	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR7/4
12	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 褐色 7.5YR6/1
13	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい褐色 7.5YR7/4
14	古墳	トレンチ2	3層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR6/1 灰黄褐色 10YR6/2
15	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい黄褐色 10YR6/3
16	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/3 浅黄褐色 2.5Y7/4
17	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5Y7/3
18	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 2.5YR6/6 褐色 2.5YR6/6
19	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3
20	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/3 灰黄褐色 10YR6/2
21	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR6/1 褐色 10YR6/1
22	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に斜位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR5/1 灰黄褐色 10YR6/2
23	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR6/1 褐色 10YR6/1
24	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR5/1 灰黄褐色 10YR6/2
25	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4
26	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に縦位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4
27	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に斜位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4
28	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に斜位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/4 にぶい褐色 5YR6/4
29	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に斜位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 5YR6/1 にぶい褐色 7.5YR6/4
30	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に斜格子目タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 7.5YR5/1 褐色 10YR5/1
31	古墳	トレンチ2	3層	口縁部外面に斜格子目タタキ後横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4
32	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に斜格子目タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR5/1 灰褐色 5YR5/2
33	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に斜格子目タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄褐色 10YR5/2
34	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面に斜格子目タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4
35	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に斜格子目タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR5/1 灰黄褐色 10YR5/2
36	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面に横長格子目状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR5/1 浅黄褐色 10YR8/4
37	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面に横長格子目状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/4 浅黄褐色 10YR8/4
38	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面に斜格子目状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/2 浅黄褐色 10YR8/4

番号	時代	出土位置	層位	技法上の特徴	色調（上段：外面／下段：内面）
39	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に斜格子目状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・橙色 75YR6/4 灰褐色 75YR6/2
40	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・橙色 75YR6/4 にふい・褐色 75YR6/4
41	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面に矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色色 10YR5/1 灰黄褐色 10YR6/2
42	古墳	トレンチ2	3層	口縁部外面に矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 5YR6/4 にふい・褐色 5YR6/4
43	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に矢羽根形タタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR6/2 にふい・黄褐色 10YR6/3
44	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に矢羽根形タタキ 胴部内面に二枚目条痕	灰褐色 75YR5/2 にふい・褐色 5YR6/4
45	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75YR6/4 灰褐色 75YR5/2
46	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・黄褐色 10YR6/3 にふい・黄褐色 10YR6/3
47	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR5/2 にふい・黄褐色 10YR6/4
48	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に横位平行タタキ後矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75YR6/4 にふい・褐色 75YR6/4
49	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に横位平行タタキ後矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色色 10YR6/1 灰黄褐色 10YR6/2
50	古墳	トレンチ1	4層	口縁部外面に横位平行タタキ後矢羽根形タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75YR6/4 にふい・褐色 75YR6/4
51	古墳	トレンチ2	土坑1	口縁部外面に山形状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 5YR6/3 にふい・褐色 75YR6/3
52	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面にタタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75YR6/4 にふい・黄褐色 75YR6/3
53	古墳	トレンチ3	2層	口縁部外面にタタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・黄褐色 75YR6/4 にふい・黄褐色 10YR7/3
54	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面にタタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・黄褐色 10YR6/3 にふい・黄褐色 10YR6/3
55	古墳	トレンチ2	包含層	口縁部外面にタタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色色 10YR5/1 褐色色 10YR4/1
56	古墳	1区	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰白色 10YR8/2 灰黄褐色 10YR6/2
57	古墳	1区	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75YR7/4 灰黄褐色 10YR6/2
58	古墳	1区	包含層	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 75YR5/2 灰褐色 75YR6/2
59	古墳	1区	包含層	口縁部外面に斜格子目状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 10YR7/3 浅黄褐色 10YR8/3
60	古墳	1区	包含層	口縁部外面に斜格子目状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 25YR6/6 にふい・黄褐色 10YR7/3
61	古墳	1区	包含層	口縁部外面に横長格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 25YR6/6 にふい・黄褐色 10YR7/3
62	古墳	1区	包含層	口縁部外面に横長格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色色 10YR5/1 灰色 NS/0
63	古墳	1区	包含層	口縁部外面に横長格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 5YR6/4 にふい・褐色 75YR6/4
64	古墳	1区	包含層	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色色 75YR5/1 褐色色 75YR5/2
65	古墳	1区	包含層	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面に指痕 胴部内面に平行タタキ板痕	黄灰色 25Y4/1 黄灰色 25Y4/1
66	古墳	1区	包含層	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 5YR6/4 にふい・褐色 5YR6/3
67	古墳	1区	包含層	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・黄褐色 10YR6/3 にふい・黄褐色 10YR6/3
68	古墳	1区	包含層	口縁部外面に斜格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75YR6/4 灰褐色 75YR6/2
69	古墳	1区	包含層	口縁部外面に斜格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75Y7/3 にふい・褐色 75Y6/4
70	古墳	1区	包含層	口縁部外面に斜格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 75Y6/3 にふい・褐色 75Y6/3
71	古墳	1区	包含層	口縁部外面に斜格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・褐色 5YR6/4 にふい・褐色 75Y6/3
72	古墳	1区	包含層	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色色 10YR4/1 褐色色 10YR5/1
73	古墳	1区	包含層	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にふい・赤褐色 5YR5/3 にふい・褐色 75YR6/4

番号	時代	出土位置	層位	技法上の特徴	色調 (上段:外面/下段:内面)
74	古墳	1区	包含層	口縁部外面にタタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい赤褐色 5YR5/3 褐色 5YR5/1
75	古墳	1区	包含層	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/3
76	古墳	1区	包含層	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 7.5YR6/3 灰褐色 7.5YR6/2
77	古墳	1区	包含層	胴部内面ナデ仕上げ	褐色 5YR6/6 にぶい黄褐色 10YR7/2
78	古墳	1区	包含層	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR6/2 褐色 10YR5/1
79	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/2
80	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/2
81	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/3 灰色 N4/0
82	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に二枚貝条痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 褐色 7.5YR6/1
83	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/3 灰褐色 7.5YR5/2
84	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい褐色 10YR7/3
85	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい赤褐色 5YR5/4 褐色 5YR4/1
86	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に二枚貝条痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい赤褐色 5YR5/4 褐色 5YR5/4
87	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/4 褐色 5YR5/3
88	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に斜格子目タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 10YR7/3 にぶい褐色 10YR7/3
89	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に斜格子目タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR7/4 にぶい褐色 5YR6/3
90	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横長格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	黄灰色 2.5Y5/1 灰黄褐色 10YR6/2
91	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に横長格子目状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/3
92	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面に指痕 胴部内面に凸て具痕?後ナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4
93	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 2.5YR6/6 にぶい褐色 7.5YR6/3
94	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 7.5YR6/2 灰白色 10YR8/1
95	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に矢羽根形タタキ・内面にナデ仕上げ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/3 にぶい褐色 5YR5/3
96	古墳	1区	土坑3	口縁部外面に矢羽根形タタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR7/4 灰褐色 7.5YR6/2
97	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/4 にぶい褐色 10YR7/3
98	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4
99	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4
100	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 7.5YR5/2 褐色 10YR5/1
101	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい赤褐色 2.5YR5/4 褐色 10YR5/1
102	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 7.5YR4/1 にぶい褐色 5YR6/4
103	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/4 褐色 5YR6/6
104	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 7.5YR5/1 灰褐色 7.5YR6/2
105	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ、口縁部部に穿孔	にぶい褐色 5YR6/4 にぶい褐色 5YR6/4
106	古墳	1区	土坑3	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 7.5YR5/2 褐色 7.5YR6/4
107	古墳	2区	土器溜まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/2 にぶい黄褐色 10YR7/4
108	古墳	2区	土器溜まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 10YR7/3

番号	時代	出土位置	層位	技法上の特徴	色調 (上段:外面/下段:内面)
109	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に条線 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい橙色 5YR6/4 にぶい橙色 5YR6/4
110	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に条線 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい橙色 5YR6/4 にぶい橙色 5YR6/4
111	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4
112	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい赤褐色 5YR5/4 灰褐色 5YR5/2
113	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 7.5YR6/2 にぶい黄褐色 10YR7/2
114	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に掌痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR6/3
115	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 10YR7/2 にぶい褐色 10YR7/2
116	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR7/4
117	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/3 灰黄褐色 10YR6/2
118	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい褐色 7.5YR7/3
119	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	明赤褐色 2.5YR5/6 2.5YR5/3
120	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 7.5YR6/2 褐色 7.5YR7/6
121	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	黒褐色 7.5YR3/1 灰褐色 7.5YR5/1
122	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に横位平行タタキ後ナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 10YR7/2 にぶい褐色 10YR7/2
123	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面にタタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	明褐色 7.5YR7/2 灰褐色 5YR6/2
124	古墳	2区	土器層まり	口縁部内外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい赤褐色 7.5YR5/3 7.5YR6/4
125	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に粗いナデ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい赤褐色 5YR5/3 褐色 5YR4/1
126	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面にタタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/3 にぶい褐色 5YR6/3
127	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に矢羽模状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/3
128	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に矢羽模状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5Y7/3 にぶい褐色 7.5Y7/4
129	古墳	2区	土器層まり	口縁部外面に矢羽模状タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR7/4 灰褐色 5YR6/2
130	古墳	2区	ビット1	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	灰白色 2.5YR/1 灰白色 2.5YR/1
131	古墳	2区	ビット1	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR6/2 灰黄褐色 10YR6/2
132	古墳	2区	ビット1	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR6/4 にぶい褐色 5YR7/3
133	古墳	2区	ビット1	口縁部外面に斜格子目タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	明褐色 5R7/1 灰白色 10RY7/1
134	古墳	2区	ビット2	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 5YR6/6 褐色 5YR5/1
135	古墳	2区	ビット2	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR6/3 褐色 10YR5/1
136	古墳	2区	ビット2	口縁部外面にタタキ後ナデ 胴部内面はナデ仕上げ	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい黄褐色 10YR6/4
137	古墳	2区	ビット2	口縁部外面にタタキ後ナデ・内面はナデ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 10YR6/1 灰黄褐色 10YR6/2
138	古墳	2区	ビット3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 10YR5/2 にぶい褐色 7.5YR5/3
139	古墳	2区	ビット3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5Y6/3
140	古墳	2区	ビット3	口縁部外面に横位平行タタキ 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 7.5YR5/1 灰褐色 7.5YR5/2
141	古墳	2区	ビット3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	褐色 7.5YR5/1 灰黄褐色 10YR6/2
142	古墳	2区	ビット3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3
143	古墳	2区	ビット3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	灰褐色 5YR5/2 にぶい褐色 2.5YR6/4

番号	時代	出土位置	層位	技法上的特徴	色調 (上段:外面/下段:内面)
144	古墳	2区	ピット3	口縁部外面に横位平行タタキ・内面に二枚貝条痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 25YR6/4 にぶい褐色 25YR6/4
145	古墳	2区	ピット3	口縁部外面に矢羽根状タタキ・内面に指痕 胴部内面はナデ仕上げ	にぶい褐色 5YR7/4 にぶい褐色 5YR7/4

## 3 土製品観察表

番号	器種	出土位置・層位	法量 (cm)	重量 (g)	技法上的特徴	色調	焼成	残存	整理番号
1	飯煎甕	1区 土曜墓2	高 8.4 口径 0.9	径 5.6 重 (5.40)	外面はナデと指圧痕 内面はシボリ痕とナデ	明褐色 7.5YR5/6	良	完形	R2-6
185	管状土鉢	トレンチ4 5層	長 3.20 口径 0.37	径 1.46 重 (5.40)		にぶい黄褐色 10YR6/4	やや不良	ほぼ完形	H5-5
186	管状土鉢	2区 土器溜まり	長 3.90 口径 0.40	径 0.90 重 3.02		浅黄褐色 10YR8/4	良	完形	R2-10
187	管状土鉢	2区 包含層	長 3.90 口径 0.30	径 1.00 重 3.57		浅黄褐色 10YR8/3	良	完形	R2-13
188	管状土鉢	2区 土器溜まり	長 4.05 口径 0.38	径 1.05 重 3.97		にぶい黄褐色 10YR7/3	良	完形	R2-11
189	管状土鉢	2区 包含層	長 4.10 口径 0.39	径 1.15 重 5.60		にぶい褐色 5YR6/4	良	完形	R2-12
190	管状土鉢	1区 包含層	長 5.90 口径 0.29	径 1.50 重 12.42		灰黄色 2.5Y6/2	良	完形	R2-7
191	管状土鉢	1区 包含層	長 (6.20) 口径 0.27	径 1.55 重 13.23		にぶい褐色 7.5YR6/4	やや不良	ほぼ完形	R2-8
192	管状土鉢	トレンチ1 4層	長 7.10 口径 0.45	径 1.80 重 18.63		にぶい褐色 7.5YR5/4	良	完形	H5-12
193	管状土鉢	トレンチ3 2層	長 8.50 口径 0.50	径 2.00 重 28.48		黄灰色 2.5Y5/1	やや不良	完形	H5-13
194	管状土鉢	トレンチ2 1層	長 6.20 口径 1.80	径 4.90 重 79.58		灰黄褐色 10YR5/2	やや不良	完形	H5-11
195	管状土鉢	トレンチ2 土坑1	長 7.60 口径 1.80	径 4.30 重 98.70		にぶい褐色 5YR6/4	やや不良	完形	H5-14
196	管状土鉢	トレンチ4 土坑2	長 7.40 口径 2.30	径 6.20 重 290.0		にぶい褐色 7.5YR5/3	良	完形	H5-15
197	双孔棒状土鉢	トレンチ1 4層	長 (2.50) 口径 0.27	径 0.93 重 (2.83)		明褐色 7.5YR5/6	やや不良	1/2	H5-4
198	双孔棒状土鉢	トレンチ1 4層	長 (2.95) 口径 0.35	径 1.20 重 (6.40)		黒褐色 2.5Y3/1	良	1/3	H5-3
199	双孔棒状土鉢	2区 土器溜まり	長 (3.30) 口径 0.40	径 1.15 重 (5.76)		オリーブ黒色 5Y3/1	やや不良	1/2	R2-9
200	双孔棒状土鉢	トレンチ1 4層	長 (5.10) 口径 0.32	径 1.10 重 (8.60)		にぶい赤褐色 5YR5/4	良	2/3	H5-1
201	双孔棒状土鉢	トレンチ4 土坑2 8層	長 (3.90) 口径 0.29	径 1.10 重 (7.10)		にぶい黄褐色 10YR6/4	良	1/2	H5-2
202	有溝土鉢	トレンチ2 3層	長 3.90 厚 2.20	幅 2.70 重 23.00		にぶい褐色 7.5YR5/4	良	完形	H5-6
203	有溝土鉢	トレンチ4 5層	長 4.90 厚 2.40	幅 2.90 重 (29.44)		黄褐色 2.5Y5/3	やや不良	ほぼ完形	H5-9
204	有溝土鉢	トレンチ6 如伏遺構1 5層	長 5.80 厚 2.85	幅 3.00 重 43.86		灰黄色 2.5Y6/2	やや不良	完形	H5-8
205	有溝土鉢	トレンチ4 5層	長 5.40 厚 3.10	幅 2.90 重 37.77		浅黄褐色 10YR8/4	良	完形	H5-7
206	有溝土鉢	トレンチ1 4層	長 5.30 厚 2.30	幅 3.90 重 41.05		オリーブ褐色 2.5Y4/3	良	完形	H5-10
207	紡錘車	1区 包含層	広面径 (4.70) 狭面径 (2.10) 口径 (0.60) 厚 3.10	重 (15.22)		淡赤褐色 2.5YR7/4	良	1/4	R2-14
208	泥面子?	トレンチ6	長 2.45 厚 0.80	幅 1.50 重 2.11	型作り	褐色 7.5YR7/6	良	ほぼ完形	H5-22
209	丸玉	トレンチ4 5層	長 0.89 口径 0.14	径 0.88 重 0.60		黒色 5Y2/1	良	ほぼ完形	H5-23

( )内は残存値

## 第2章 西元浜貝塚

### 第1節 位置と環境

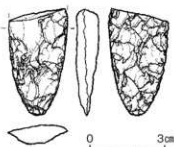
西元浜貝塚は倉敷市玉島黒崎字氏内ほかに所在している。玉島地区は倉敷市の南西部に位置し、西には佐方竜王山(標高231m)から続く尾根が伸び、北西から北にかけては遙照山(標高405m)から弥高山(標高307m)へ連なる山々がそびえる。東は中国山地から流れ出た高梁川が南流し、南は瀬戸内海に面している。この玉島地区内でも黒崎地区は最も西に位置し、西は浅口市、東は玉島勇崎地区に接し、南は瀬戸内海を臨んでいる。浅口市との境界は、標高231mの佐方竜王山を起点に北東方向と南西方向に延びる尾根である。この尾根の北側は浅口市鴨方町・金光町の平野部が広がっており、中程を里見川が東流している。里見川は佐方竜王山から北東に延びる尾根の北東端と、その北側に位置する八重丘陵(標高50m程)の間を抜け、柏島丘陵(柏島地区)の北側をまわって玉島港へとそそいでいる。黒崎地区と柏島丘陵の間には狭い水田地帯(勇崎地区)が存在するが、ここは近世以降の干拓によって陸地化したもので、中世以前には海が深く入り込んでおり、柏島丘陵もその名のとおり島であった<sup>1)</sup>。この狭い水田地帯(勇崎地区)に沿った黒崎地区側の山裾にあたる場所では、断続的ながら海岸段丘状地形が残っており、西元浜貝塚、中津貝塚もこの段丘縁片部に形成されている。また、当時の海は、八重丘陵南端からさらに西側に入り込んでいたらしく、浅口市金光町大谷には「津」の地名が残っている<sup>2)</sup>。中世までの浅口郡の中心地は、鴨方周辺にあり、金光町大谷のあたりが海への玄関口の一つであったのであろう。



第43図 遺跡の位置

瀬戸内海が形成される以前、旧石器時代の玉島地区には、柏島や乙島などが丘陵地帯として存在していたと考えられる。これらの丘陵の尾根筋ではサヌカイトの散布する地点がいくつか認められるが、旧石器時代の遺跡としては明確なものとは知られていない。黒崎の沙美で採集されたとされるナイフ形石器<sup>3)</sup>が存在するが、採集地点ははっきりしていない。沙美海岸の周辺には、小原南遺跡・諏訪神社遺跡・山王遺跡など丘陵上に立地する遺跡があり、サヌカイトの剥片などが採集されていることから、これらの遺跡から採集されたものである可能性がある。また、隣接する倉敷市船越町の福島山遺跡<sup>4)</sup>や浅口市金光町の八重遺跡<sup>5)</sup>などからはナイフ形石器が見つかっており、今後、玉島地区内でも同時代の遺跡が確認される可能性は高い。

黒崎地区は旧石器時代末から縄文時代草創期に属するとされる尖頭器が複数見つかることで注目される。中津貝塚とその周辺で有茎尖頭器4点<sup>6)</sup>、西元浜山麓で柳葉形尖頭器1点が採集されて



第44図 西元浜採集尖頭器  
(S=2/3)

いる。第44図は地元の郷土史研究者である中山頼夫氏によって西元浜で採集された尖頭器である<sup>(6)</sup>。先端半分を失っているが、サヌカイト製で残存長4.32cm、幅2.43cm、厚さ0.86cm、残存重量9.11gを量る。また、中津貝塚の範囲確認調査<sup>(7)</sup>においては縄文時代草創期に該当する安定的な地表面が検出されており、今後、この地域で当該時期の遺跡が発見されることが期待される。

縄文海進によって瀬戸内海が誕生すると、柏島・乙島などが島として分離し、その間は浅い水道の様相を呈していた。ここに里見川

や富田川等が運んでくる土砂が徐々に堆積し、浅海性の貝類が生育するようになり、周辺に貝塚が形成されるようになったと考えられる。玉島黒崎地区と柏島間の水道沿いには、黒崎側に西元浜貝塚と中津貝塚、柏島側に東元浜貝塚が知られている。

中津貝塚は、竜王山の東側から流れ出した屋守川によって形成された扇状地形が海蝕によって削られた段丘上に立地している。その存在は大正年間から知られており、地元研究者である宗澤節雄らによって調査が行われ、縄文時代後期を中心とした土器などが出土した<sup>(8)</sup>。これらの土器の表面には、縄文を施した後に沈線を刻み、その間の縄文を部分的に消す磨消縄文の技法が用いられており、中国・四国地方の縄文時代後期の指標土器となっている<sup>(9)</sup>。また、近年の岡山県と倉敷市による範囲確認調査では、貝層や埋葬の分布範囲も把握されるようになってきている<sup>(7)</sup>。

本書で報告する西元浜貝塚は、中津貝塚の北約1kmに所在し、やはり海岸段丘の名残と思われる果樹畑の段斜面に貝層が露出している。縄文時代中・後期を中心とした貝塚で、中津貝塚より規模が小さいと推定されている。西元浜貝塚から狭い水道を挟んで東側の柏島に所在する東元浜貝塚は、現在、周辺が墓地となっており、貝殻などの散布も認められず、実態がよくわかっていない。

このほかにも竜王山から伸びる尾根先端、柏島との間の水道に突出する低い尾根上からは縄文時代の石鏃やサヌカイト片が採集されている。釜屋ノ上遺跡や氏内遺跡などがそれである。釜屋の上遺跡は、平成28年に道路改良工事に伴って確認調査が実施されたが、遺物や遺構などは確認されず、開墾等によって削平されてしまっているものと考えられる<sup>(10)</sup>。

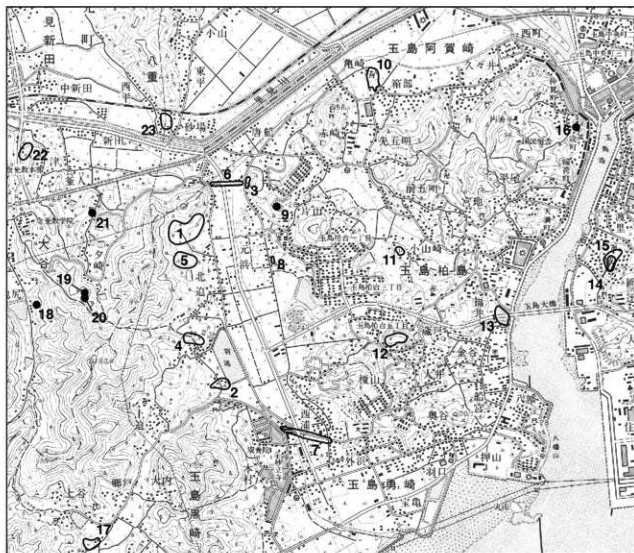
倉敷市玉島地区は弥生時代においても海が広がっており、大規模な集落跡は確認できないが、北西の遙照山から派生する尾根筋に点々と集落が営まれていたようである。玉島富の平松遺跡<sup>(11)</sup>や浅口市金光町との境界にあるジョオゴナル遺跡は高地性の集落として注目される<sup>(12)</sup>。また、玉島黒崎地区内でも、中津貝塚のある新池から南西の谷筋に入った屋守地区の奥に、奥山南遺跡や新殿向遺跡など弥生時代の土器や石器が採集される遺跡がある。

古墳時代になると、前期古墳としては玉島八島の海に突出した岬上に天王山古墳が築かれる。墳長45m程の前方後円墳と推定され、円筒埴輪を持つことがわかっている<sup>(13)</sup>。その他にも玉島道口の上郷古墳や玉島黒崎の諏訪神社境内古墳等の箱式石棺が前期古墳と推定されている。

古墳時代後期の横穴式石室墳は黒崎地区南部の海岸沿いにおやまのひら古墳や七社神社北古墳が知られており、魚介類の採取や製塩を生業とした人々の墳墓と考えられているが、西元浜貝塚の近辺にもいくつかの後期古墳が築かれている。西元浜貝塚から狭い水道を挟んで東側の柏島に東元浜古墳、

西へ山を越えた浅口市金光町大谷周辺に荒神前の塚古墳、夕崎1・2号墳などがある。これらの古墳は消滅したり、大きく破壊されたりしており、実態については不明である。

古代の様子はよくわかっていないが、平安末には玉島八島地区の神前神社周辺で亀山焼の生産が始まり、室町時代まで続いている<sup>(14)</sup>。治承・寿永の乱においては、玉島の乙島と柏島間の水道が戦いの舞台となったと伝えられている。寿永2年(1183)、水鳥の合戦の際に乙島の水鳥城跡が木曾義仲の陣、柏島の森本松山城跡が平家方の陣であったと伝えられる<sup>(15)</sup>。しかし、これらの城跡に現在残る遺構は、当時のものではなくその後の戦国時代を中心としたものと考えられている。ほかに柏島地区に亀崎城跡・畑山城跡などの小規模な城館があるが、発掘調査が行われたものではなく詳細は不明である。



- |            |          |           |          |          |
|------------|----------|-----------|----------|----------|
| 1 西元浜貝塚    | 2 中津貝塚   | 3 東元浜貝塚   | 4 釜屋ノ上遺跡 | 5 氏内遺跡   |
| 6 桜の堤      | 7 正保堤    | 8 東元浜南貝塚  | 9 東元浜古墳  | 10 亀崎城跡  |
| 11 小山崎城跡   | 12 畑山城跡  | 13 森本松山城跡 | 14 常照院貝塚 | 15 水鳥城跡  |
| 16 住吉山公園石積 | 17 新殿遺跡  | 18 古墳     | 19 夕崎1号墳 | 20 夕崎2号墳 |
| 21 荒神前の塚古墳 | 22 釜屋敷遺跡 | 23 八重遺跡   |          |          |

第45図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)



江戸時代には岡山県南部の干潟が干拓されて、急速に水田に変わっていった。黒崎地区と柏島の間の水道も同様で、備中松山藩によって正保3年(1646)に勇崎元浜新田が開発され、今日のような景観ができあがったのである<sup>(15)</sup>。

明治維新後、明治22年(1889)の町村制施行により浅口郡黒崎村が発足、昭和26年の町制施行で黒崎町になり、昭和28年には玉島市と合併、昭和42年の倉敷市・玉島市・児高市の旧三市の合併を経て倉敷市となり、今日にいたっている<sup>(16)</sup>。

## 第2節 調査に至る経緯と経過

昭和63年10月31日、倉敷市玉島黒崎における宅地造成計画に関する遺跡の取り扱いについて、倉敷市教育委員会と開発コンサルタント会社との間で協議が行われた。その結果、開発予定地の一部には周知の遺跡である西元浜貝塚が存在するため、まず確認調査で遺跡の正確な範囲を把握したのち、工事で破壊される部分については全面発掘調査を行うことで合意した。翌月の11月28日から12月10日にかけて確認調査を実施した結果、貝塚の中心部に最も近いトレンチ3・4で縄文時代の遺物が確認され、開発区域の北東端に遺跡が残存していることが明らかとなった。この調査結果をもとに遺跡の保存協議を行ったが、現段階での計画変更は困難であることからやむをえず、遺跡に影響を与える擁壁建設部分について全面発掘調査を行うこととなった。

発掘調査では、幅2m、総延長73mの細長い調査区を1～5区に分けて設定し、平成2年6月1日から6月22日の期間に実施した。全面的にブドウ栽培によるかく乱を受けており、遺構は検出されなかった。遺物は1区・2区・5区で石器を中心に出土した。調査範囲が外周に限られているが、広範囲にわたって縄文時代の遺物包含層が削平されていることが知られた。

### < 調査日誌抄 >

- 平成2年6月 1日 機材搬入。草刈り開始。  
 6月 4日 1区の表土剥ぎ開始。  
 6月 7日 2区の表土剥ぎ開始。  
 6月11日 3区の表土剥ぎ開始。2区で石斧等縄文時代遺物出土。  
 6月13日 4・5区の表土剥ぎ開始。3区の写真撮影。  
 6月18日 3区の実測完了。  
 6月20日 1区の実測完了。  
 6月22日 全てのトレンチで埋め戻しを完了し、機材撤収。

### 西元浜貝塚範囲確認調査委員会

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	花岡洋右	倉敷市教育委員会	社会教育部長
委員	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会	会長
専門委員	福本 明	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
専門委員	鍵谷守秀	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
専門委員	小野雅明	倉敷市教育委員会	文化課学芸員

監 事	三宅正廣	倉敷市教育委員会	社会教育部次長
事務局長	小野盛樹	倉敷市教育委員会	文化課長補佐
書 記	井上 元	倉敷市教育委員会	文化課文化財係長 (肩書き及び役職名等はいずれも調査当時)

#### 西元浜貝塚発掘調査委員会

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	安田貞男	倉敷市教育委員会	教育次長
委 員	岡田三朗	倉敷市教育委員会	社会教育部長
委 員	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会	会長
専門委員	福本 明	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
専門委員	鍵谷守秀	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
専門委員	小野雅明	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
専門委員	谷岡孝久	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
監 事	三宅正廣	倉敷市教育委員会	社会教育部次長
事務局長	小野盛樹	倉敷市教育委員会	文化課長補佐
書 記	香西文雄	倉敷市教育委員会	文化課文化財係長 (肩書き及び役職名等はいずれも調査当時)

報告書作成にあたって石器石材の同定(肉眼観察)に関しては、倉敷市立自然史博物館主幹 武智泰史氏のお手を煩わせた。記して感謝申し上げます。

### 第3節 調査の概要

#### 1 確認調査の概要

確認調査は、2m×2mのトレンチを11地点に設定して実施した。土層観察では標準土色帖を使用していないが、調査当時の土色表記をそのまま記載する。

##### トレンチ1

表土、造成土に続き、地表下約20cmで厚さ30～40cmの黄褐色硬質土がみられる。その下はさらに固くしまった黄茶褐色硬質土の地山となる。いずれの層からも遺物は出土しておらず、遺構は検出されなかった。

##### トレンチ2

表土直下の造成土である4層の淡茶褐色硬質土から縄文土器、石鏃、石製装身具等の縄文時代の遺物、古墳時代、中世の土器が出土した。遺物は5層の茶褐色硬質土からも出土したが、6層以下の層には遺物が含まれない。地表下約120cmで黄褐色硬質土の地山に達する。

##### トレンチ3

1層の耕作土、2層の淡褐色土からサヌカイト石鏃、縄文土器、近代の土器が出土した。3層の黄灰褐色土にはサヌカイト片が含まれている。この層の上面は果樹園の造成により攪乱されているようである。その下の4層にもサヌカイト片が含まれており、3・4層は縄文時代の包含層と思われる。遺構は検出されなかった。5層以下の層には遺物が含まれていない。

#### トレンチ4

トレンチ3と同様に、1層の耕作土、3層の淡褐色土からサヌカイト石鏃、縄文土器、近代の陶磁器が出土した。黄灰褐色土の4層、5層からも縄文土器、石鏃、サヌカイト片が出土しており、縄文時代の包含層と思われる。遺構は検出されなかった。6層の灰茶色粘質土には遺物が含まれていない。

#### トレンチ5

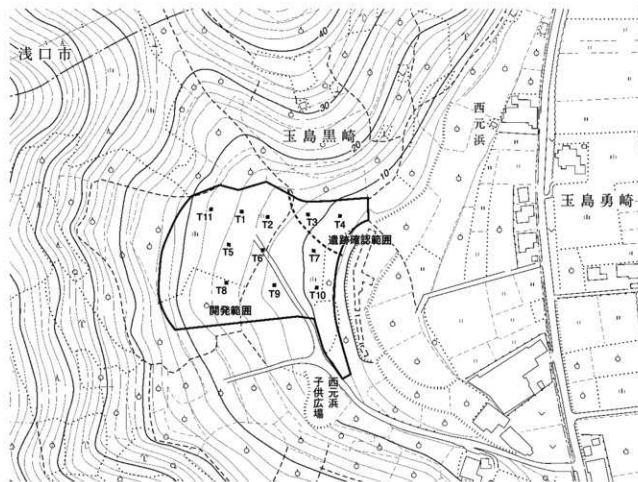
表土、造成土に続いて厚さ約20cmの黄褐色硬質土がみられ、地表下30～40cmで黄茶褐色硬質土の地山となる。各層から遺物は出土していない。

#### トレンチ6

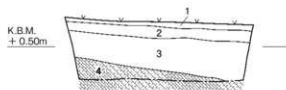
表土に続き、地表下60～70cmまでが造成土である。その下にある5層の茶褐色土にはわずかながら縄文土器が含まれる。6層の黄茶褐色には遺物が含まれず、地表下約120cmで明黄褐色土の地山となる。

#### トレンチ7

表土、耕作土に続き、地表下40～60cmまでが造成土である。明黄褐色土の地山直上にある5層の茶褐色土にはわずかながら縄文土器が含まれる。斜面の落ち込みに堆積した6～8層には遺物が含まれない。

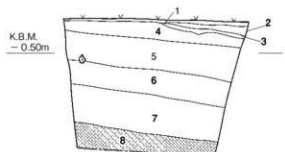


第46図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/2,500)



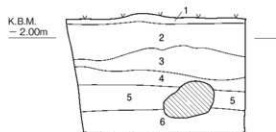
## トレンチ1北壁層序

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1 暗茶褐色土(表土)    | 3 黄褐色硬質土      |
| 2 淡茶褐色硬質土(造成土) | 4 黄茶褐色硬質土(地山) |



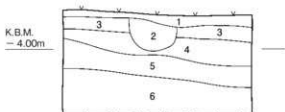
## トレンチ2北壁層序

- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1 暗茶褐色砂質土(表土)  | 5 茶褐色硬質土     |
| 2 淡茶褐色硬質土(造成土) | 6 褐色硬質土      |
| 3 黄灰褐色硬質土(造成土) | 7 淡黄褐色硬質土    |
| 4 淡茶褐色硬質土(造成土) | 8 黄褐色硬質土(地山) |



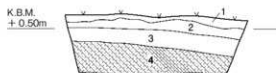
## トレンチ3北壁層序

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1 暗褐色土(耕作土)  | 4 黄灰褐色土(包含層) |
| 2 淡褐色土       | 5 灰茶色粘質土     |
| 3 黄灰褐色土(包含層) | 6 赤茶色粘質土     |



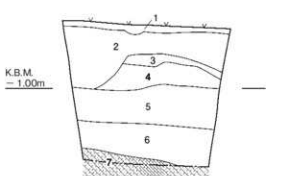
## トレンチ4北壁層序

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1 暗褐色土(耕作土)  | 4 黄灰褐色土(包含層) |
| 2 暗灰褐色土(攪乱坑) | 5 黄灰褐色土(包含層) |
| 3 淡褐色土       | 6 灰茶色粘質土     |



## トレンチ5北壁層序

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1 暗褐色砂質土(表土)   | 3 黄褐色硬質土      |
| 2 淡茶褐色硬質土(造成土) | 4 黄茶褐色硬質土(地山) |



## トレンチ6北壁層序

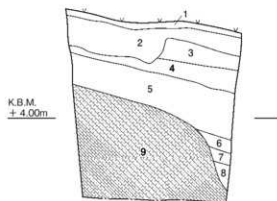
- |               |             |
|---------------|-------------|
| 1 茶褐色砂質土(表土)  | 5 茶褐色土      |
| 2 暗灰褐色土(造成土)  | 6 黄茶褐色土     |
| 3 淡褐色硬質土(造成土) | 7 明黄褐色土(地山) |
| 4 暗褐色硬質土(造成土) |             |



第47図 トレンチ断面図1 (S=1/40)

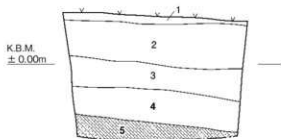
## トレンチ8

表土の下、造成土である2層の茶褐色硬質土および3層の暗茶褐色からわずかながら縄文時代、古墳時代、中近世の土器が出土した。4層の暗黄褐色には遺物が含まれず、地表下約120cmで黄褐色硬質土の地山となる。



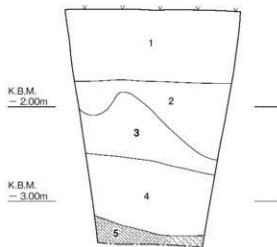
トレンチ7北壁層序

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1 暗黒褐色砂質土(表土)  | 6 暗褐色細砂       |
| 2 淡黒褐色砂質土(耕作土) | 7 黄褐色細砂       |
| 3 黄褐色硬質土(造成土)  | 8 暗茶色細砂       |
| 4 茶褐色硬質土(造成土)  | 9 明黄褐色硬質土(地山) |
| 5 暗茶色土         |               |



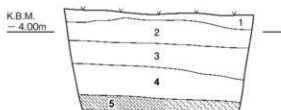
トレンチ8北壁層序

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1 淡茶灰色砂質土(表土) | 4 暗黄褐色土      |
| 2 茶褐色硬質土(造成土) | 5 黄褐色硬質土(地山) |
| 3 暗茶褐色土(造成土)  |              |



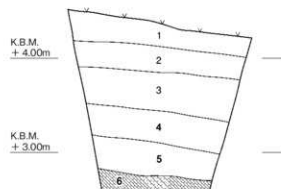
トレンチ9北壁層序

- |                  |              |
|------------------|--------------|
| 1 赤茶色土・淡灰色土(造成土) | 4 淡茶褐色土      |
| 2 暗褐色土・礫(造成土)    | 5 黄灰色粘質土(地山) |
| 3 茶褐色土           |              |



トレンチ10北壁層序

- |               |               |
|---------------|---------------|
| 1 灰白色砂質土(表土)  | 4 黄灰褐色硬質土     |
| 2 淡黄灰褐色土(造成土) | 5 黄灰白色硬質土(地山) |
| 3 淡茶白色土(造成土)  |               |



トレンチ11北壁層序

- |                |              |
|----------------|--------------|
| 1 淡茶褐色硬質土(造成土) | 4 暗茶色土       |
| 2 淡茶色硬質土(造成土)  | 5 暗黄褐色土      |
| 3 茶褐色土         | 6 黄褐色硬質土(地山) |

第48図 トレンチ断面図2 (S=1/40)

トレンチ9

地表下90～160cmまで造成土で、その下の3層の茶褐色土は攪乱を受けているが、縄文時代、中世の土器が含まれる。4層の淡茶褐色土には遺物が含まれておらず、地表下約230cmで黄灰色粘質土

の地山となる。

#### トレンチ10

表土の下には、2層の淡黄灰褐色土、3層の淡茶白色土がみられ、いずれの層にもサヌカイト片、古墳時代、中近世の土器がわずかに含まれている。4層の黄灰褐色硬質土には遺物が含まれず、地表下約90cmで黄灰白色硬質土の地山となる。

#### トレンチ11

地表下40～60cmまで造成土で、その下の3層の茶褐色土には中近世の土器が少し含まれる。4層の暗茶色土と5層の暗黄褐色土には遺物が含まれておらず、地表下約160cmで黄褐色硬質土の地山となる。

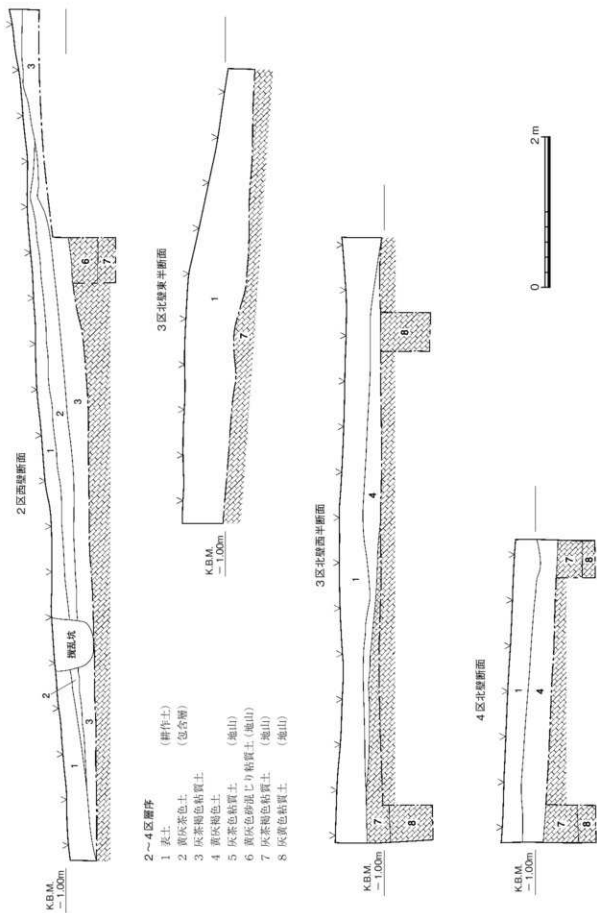
以上のように、確認調査の結果、トレンチ3・4で縄文時代の遺物包含層が確認された。この他のトレンチでも、耕作土や造成土などから縄文時代の遺物等が出土したが、開墾や造成工事により広い範囲で削平されているため、遺物包含層は残存していないと考えられる。

## 2 平成2年度の調査概要

本調査では、確認調査の結果を踏まえて宅地造成工事に伴う擁護壁建設に係る部分を調査対象とした。調査区は、幅2m、総延長73mで、敷地の一角を取り囲む細長い形状である。便宜上、この調査区を1区から5区に分けて実施した。



第49図 調査区配置図 (S=1/1,000)



第50図 2~4区断面図 (S=1/50)

## 1区

東西長38mの調査区で、上面での東西の比高差は約3.5mである。表土の厚さは15～45cmで、その下は黄灰茶色粘質土の地山となる。表土から縄文時代の石鏃、叩石、中世の土器が出土した。遺構は検出されていない。

## 2区

1区東端から続く南北長11mの調査区である。表土の下には2層の黄灰茶色土がみられ、この層から時期不明の摩耗の著しい土器の小片、磨製石斧、石鏃、サスカイト片等が出土した。3層は灰茶褐色粘質土で遺物は含まれない。3層の下は灰茶色粘質土の地山となる。遺構は検出されていない。

## 3区

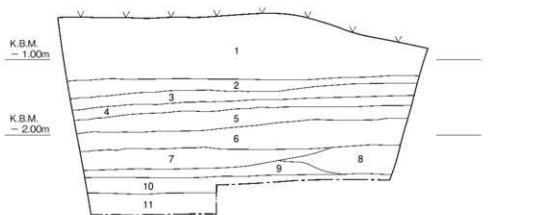
2区南端から続く延長14mの調査区である。中央東寄りで少し折れ曲がる形状である。調査区東側では、表土の下は灰茶色粘質土の地山となる。西側では、この地山との間に黄灰褐色土がみられ、この層には遺物が含まれていない。遺物は、表土から中世の土器が少量出土している程度で、遺構は検出されていない。

## 4区

3区から2.5m程度間隔を開けて南西に位置する長さ4mの調査区である。表土の下には黄灰褐色土がみられ、この層には遺物が含まれていない。地表下約60cmで灰茶色粘質土の地山となる。遺物はほとんど出土しておらず遺構は検出されていない。

## 5区

4区から4m程度間隔を開けて南に位置する長さ5mの調査区である。表土の下には水平堆積がみられ、7層以下は砂質の層に変化している。遺物は1～9層で縄文土器、サスカイト片、中世の土器が出土した。遺構は検出されていない。



## 5区西壁層序

- |                |                     |
|----------------|---------------------|
| 1 表土 (耕作土)     | 6 淡茶褐色土 (造成土)       |
| 2 黄土色砂質土 (造成土) | 7 灰茶褐色土 (造成土)       |
| 3 茶褐色土 (造成土)   | 8 褐色砂と黄灰色砂の互層 (造成土) |
| 4 茶灰色土 (造成土)   | 9 暗茶褐色土 (造成土)       |
| 5 黄茶色土 (造成土)   | 10 淡褐色砂             |
|                | 11 黄灰色粘質土           |

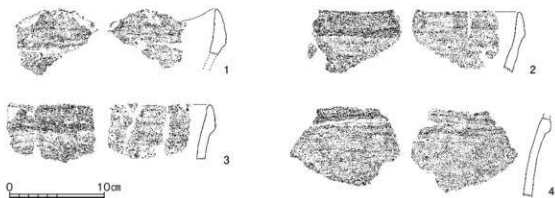
第51図 5区西壁断面図 (S=1/50)



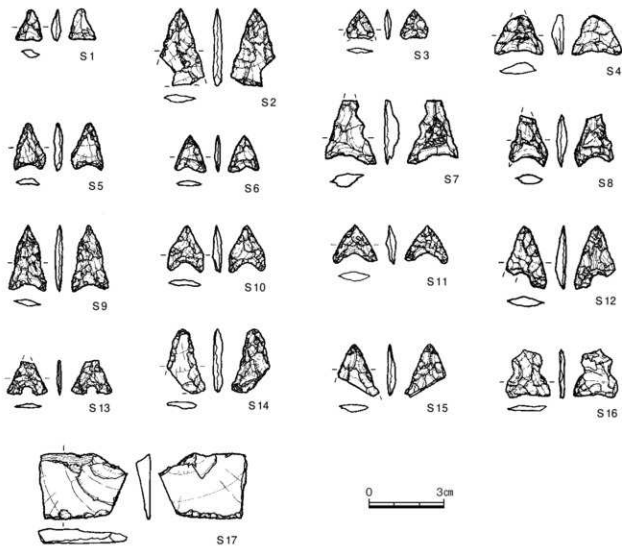
3 遺物

縄文土器 (第52図1~4)

出土した土器のほとんどが細片で、図化できるものは4点しかない。1~4はトレンチ4の4層から出土した同一個体の縄文土器である。波状口縁をもつ深鉢形土器で、口縁部が肥厚する。内外面に



第52図 縄文土器 (S=1/4)



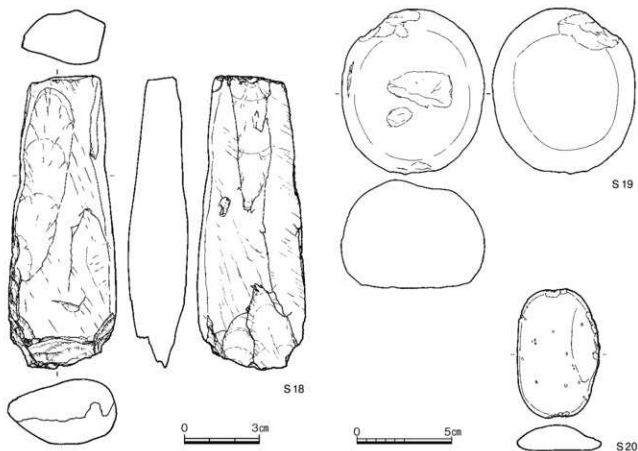
第53図 石器 1 (S=2/3)

巻貝による条痕調整がみられる。色調はにぶい黄橙色で、胎土中には1mm前後の砂粒が含まれる。

#### 石 器 (第53図 S1～第54図 S20)

サヌカイト製石器・剥片など278点、黒曜石製剥片3点、玉髄製剥片1点、流紋岩製石核・剥片15点、安山岩製石斧1点、花崗岩製叩石1点、安山岩製石錘1点が出土している。石材別の総重量はサヌカイトが1,109.40g、黒曜石は2.94g、玉髄0.90g、流紋岩587.68gである。最も多いサヌカイトは地理的条件から香川県からもたらされたものがほとんどであると考えられる。黒曜石3点は、1点が漆黒色で隠岐産、他の2点は濁った白色を呈しており姫島産と推定される。玉髄は産地不明であるが、飴色を呈しており、貝塚より古い時期のものかもしれない。流紋岩は緑灰色を呈しガラス質が強いという特徴から市内玉島黒崎で産出するものと考えられる。原産地に近いことを反映してか、重量では剥片石器石材全体の三分の一を占めるが、石鏃などの製品は認められない。製品としては石鏃17点、石鏃未製品1点、スクレイパー1点、加工痕跡のある剥片1点、楔形石器2点、石斧1点、叩石1点、石錘1点がある。

石鏃は17点が出土、あるいは採集されており、すべてサヌカイト製で16点を図化した。S1は平基鏃である。表面の風化が進んでいるが、小型、厚手で調整は粗雑である。S2は基端部の欠損が大きい、平基鏃あるいは、抉りの浅い凹基鏃と推定される。今回の出土石鏃の中では最も大きい、薄手で丁寧な作りである。S3～S13は凹基鏃である。S3～S11のように比較的抉りの浅いものが多い。S3は小型で、丁寧な調整の石鏃である。S5の調整は細かいが、周辺部のみで素材面を広く残



第54図 石器2 (S=2/3・1/2)

している。S7・S8は調整剥離が粗雑である。S9は薄手で、丁寧な調整加工が施され、側縁部は緩やかなS字状を呈する。S11は幅広で、先端部がわずかに突出する形状から、前期に属するものと推定される。S12・S13は挟りの深いものである。いずれも基部の中心部だけを深く抉ったような形態で、丁寧な調整加工が施されている。S14・S15は基部を失っており、形態がはっきりしない。S14は風化が著しく、調整が荒い。S15は比較的丁寧な調整加工が施されている。S16は調整が粗く、先端部の整形もはっきりしないことから、未製品の可能性がある。

S17はサスカイト製のスクレイパーである。やや横長の剥片の端部に、直線的な両面加工の刃部を作り出している。

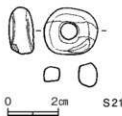
S18は安山岩製の石斧である。全体に厚手で、頭頂部は平らである。基部から胴部は打ち欠きによって大まかに整形した後に磨かれている。刃部は打ち欠きによって作り出されているが、刃部再生の途中で放棄されたものかもしれない。

S19は花崗岩製の叩石である。平面形は楕円形を呈し、敲打痕1か所、凹面とその裏面には摩耗痕も認められ、磨石などとしても使用されていたと考えられる。

S20は安山岩製の打欠石錘である。楕円形を呈する扁平な石材の上下両端をわずかに打ち欠いて紐をかける凹みとしている。

#### 装身具(第55図)

S21は蠟石製あるいは滑石製の装身具と推定される。トレンチ2の造成土中から出土しており、長径2.18cm、短径1.89cm、厚さ1.01cm、孔径0.67cm、重量5.84gである。やや青みがかった乳白色の色調で、ヒビに青黒い色素が沈着している。



第55図 装身具  
(S=2/3)

#### 第4節 まとめにかえて

西元浜貝塚の存在は古くより知られており、大正14年(1925)刊行の『浅口郡誌』<sup>(17)</sup>には、「傾斜畑地に貝殻・土器破片・動物の骨等断面に露出し、(以下略)」と記載されるとともに遠景と貝層の写真が掲載され、大正12年(1923)の発見としている。土器や石器は地元の郷土史家である西岡憲一郎や中山頼夫<sup>(18)</sup>などによって多く採集されており、縄文時代中期から後期にかけての年代が与えられている<sup>(19)</sup>が、これまで遺物などがまとまって報告されたことはない。また、1975年刊行の『倉敷市文化財分布図』や1999年刊行の『倉敷市遺跡地図(王島地区)』<sup>(20)</sup>では、遺物の採集できる範囲を遺跡範囲としていたことから、北側の斜面を含む広い範囲が遺跡として記載されていた。今回の調査では遺存状態の良い土器等の出土がなかったことから、時期について詳述する資料に欠けるが、包含層を検出したことで遺跡範囲を絞り込むことが可能となった。

昭和63年度の確認調査では、宅地造成範囲の北東部に設定したトレンチ3・4で縄文時代の包含層が確認されたが、その他のトレンチでは包含層は確認されなかった。これに基づいて平成2年度の発掘調査は宅地造成範囲の北東部を中心に実施され、その結果、2区から比較的多数の縄文時代遺物が出土した。これらのことから遺跡の範囲は宅地造成範囲の北東部が西の端であると考えられた。ただし、包含層が確認されなかったトレンチや調査区においても、縄文時代の遺物は出土しており、本来

はさらに広い範囲に遺跡が広がっていたことがうかがえる。

また、平成4年度には本遺跡の北東方向から山沿いを団地方向に向かって延びる農道の改良工事が実施され、これに伴う確認調査が行われた<sup>(2)</sup>。この時も貝層は確認されなかったが、包含層の一部を確認することができた。包含層は農道に沿って設定したトレンチの内、北から2・3番目のトレンチで検出されており、これによって残存する遺跡の北端をはば押さえることができた。



第56図 遺跡の範囲 (S=1/2,500)

北東の山側斜面については、農道の確認調査によって遺構や遺物が確認されなかったことから遺跡範囲外と判断し、東から南にかけては比高約5mの海蝕崖を遺跡の端とすれば、貝層の露出部分と調査で確認された包含層を含む遺跡の範囲としては、第56図のように長さ約130m、幅約20mの三日月形に設定できる。ただし、残っている包含層も果樹園などの耕作による削平が及んでおり、残存状況は良いとは言えない。貝層の範囲はさらに狭く、その状況については令和3・4年度に実施した範囲確認調査の報告にゆずるが、西元浜貝塚は比較的小規模な貝塚であり、かつ全体の残存状況もそれほどよくないことが明らかになった。(藤原)

#### 註

- (1) 倉敷市史研究会「新修倉敷市史 第3巻 近世(上)」倉敷市 2000
- (2) 金光町史編纂委員会「金光町史 本編」金光町 2003
- (3) 岡山県史編纂委員会「岡山県史 第二巻 原始・古代 I」岡山県 1991
- (4) 間壁霞子「岡山県浅口郡船徳町福島採集の矢柄研磨器」『倉敷考古館研究集報 第9号』(財)倉敷考古館 1974
- (5) 藤原好二「倉敷市内の有基尖頭器」『倉敷埋蔵文化財センター年報3』倉敷埋蔵文化財センター 1996  
原田虎平編「浅口郡史蹟名勝天然記念物」1931
- (6) 福本 明「中山頼夫氏寄贈の考古資料」『倉敷埋蔵文化財センター年報4』倉敷埋蔵文化財センター 1997
- (7) 小野雅明ほか「中津貝塚」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第18集 倉敷埋蔵文化財センター 2021
- (8) 宗澤節雄「中津貝塚実験記」『岡山県浅口郡黒崎村中津貝塚発見 縄紋式土器模様』水原岩太郎 1935  
宗澤亮亭「浅口郡附近の縄文式遺跡」『吉備考古』第36号 吉備考古會 1938
- (9) 水原岩太郎「岡山県浅口郡黒崎村中津貝塚発見 縄紋式土器模様」1935
- (10) 藤原好二「釜屋ノ上遺跡確認調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報16』倉敷埋蔵文化財センター 2018

- (11) 藤田憲司「倉敷市玉島富平松発見の銅鏃」『倉敷考古館研究集報 第9号』（財）倉敷考古館 1974
- (12) 福本 明「倉敷市富ジョゴナル遺跡出土の土器」『倉敷埋蔵文化財センター年報3』倉敷埋蔵文化財センター 1996
- (13) 福本 明「玉島天王山古墳出土の埴輪について」『倉敷の歴史-倉敷市史紀要- 第4号』倉敷市 1994
- (14) 岡田 博ほか「亀山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 69 建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988
- (15) 倉敷市史研究会編「新修倉敷市史 第2巻 古代・中世」倉敷市 1999
- (16) 倉敷市歴史年表編集委員会「倉敷市歴史年表」倉敷市文化連盟 1978
- (17) 中村安孝「浅口郡誌」浅口郡役所 1925
- (18) 西岡憲一郎の採集資料は岡山県古代吉備文化財センター、中山頼夫の採集資料は倉敷埋蔵文化財センターで保管されている。
- (19) 平井 勝「第三章 縄文時代」『岡山県の考古学』（株）吉川弘文館 1987
- (20) 倉敷市教育委員会「倉敷市文化財分布図」1975  
倉敷市教育委員会「倉敷市遺跡地図（玉島地区）」1999
- (21) 鎌谷守秀「西元浜貝塚確認調査報告」『倉敷市埋蔵文化財調査年報2』倉敷市教育委員会 1993

## 出土遺物観察表

## 1 縄文土器観察表

番号	出土位置	層位	時期	特徴	色 調	
					(上段：外面)	下段：内面)
1	トレンチ4	4層	後期	口縁部が肥厚する・内外面に巻貝による条痕調整	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR6/4
2	トレンチ4	4層	後期	口縁部が肥厚する・内外面に巻貝による条痕調整	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR6/4
3	トレンチ4	4層	後期	口縁部が肥厚する・内外面に巻貝による条痕調整	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR6/4
4	トレンチ4	4層	後期	口縁部が肥厚する・内外面に巻貝による条痕調整	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	10YR6/4 10YR6/4

## 2 石器計測表

番号	器 種	石 材	法 量				出土位置		整理番号
			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量(g)	トレンチ・地区	層位等	
S1	石鏃	サヌカイト	1.25	1.09	0.39	0.37	2区	2層	H2-3
S2	石鏃	サヌカイト	3.09	(1.74)	0.36	1.72	トレンチ10	2層	S63-10
S3	石鏃	サヌカイト	(1.16)	(1.11)	0.25	0.36	トレンチ2	5層	S63-3
S4	石鏃	サヌカイト	(1.59)	(1.98)	0.49	1.24	トレンチ4	4・5層	S63-8
S5	石鏃	サヌカイト	1.89	1.33	0.32	0.78	トレンチ4	4・5層	S63-7
S6	石鏃	サヌカイト	1.49	1.26	0.24	0.38	2区	2層	H2-6
S7	石鏃	サヌカイト	(2.56)	2.01	0.62	1.82	2区	2層	H2-4
S8	石鏃	サヌカイト	(2.09)	(1.58)	0.43	1.02	2区	複乱坑	H2-2
S9	石鏃	サヌカイト	2.63	1.51	0.33	1.01	トレンチ2	2~4層	S63-1
S10	石鏃	サヌカイト	1.86	1.45	0.33	0.73	トレンチ2	5層	S63-2
S11	石鏃	サヌカイト	1.52	(1.77)	0.41	0.67	トレンチ3	2層	S63-5
S12	石鏃	サヌカイト	2.56	(1.67)	0.45	1.26	1区	表土	H2-1
S13	石鏃	サヌカイト	(1.36)	1.62	0.23	0.37	トレンチ3	2層	S63-4
S14	石鏃	サヌカイト	(2.51)	(1.50)	0.36	1.25	トレンチ8	2層	S63-9
S15	石鏃	サヌカイト	(2.07)	(1.62)	0.33	0.80	トレンチ4	3層	S63-6
S16	石鏃	サヌカイト	1.93	1.79	0.24	0.84	5区	3層	H2-5
	石鏃	サヌカイト	(1.81)	1.91	0.38	1.29	トレンチ4	4・5層	
	石鏃未製品	サヌカイト	1.92	1.33	0.29	0.73	トレンチ4	4・5層	
S17	スクレイパー	サヌカイト	2.64	3.53	0.62	6.39	3区	複乱坑	H2-8
	加工痕のある割片	サヌカイト	(1.56)	1.38	0.25	0.53	5区	3層	H2-7
	楕形石器	サヌカイト	2.92	1.56	0.38	2.16	2区	複乱坑	
	楕形石器	サヌカイト	3.73	2.74	1.22	11.20	貝塚付近表採		
	石鏃	流紋岩	7.21	8.25	5.93	417.50	1区	表土	
S18	石斧	安山岩	11.78	4.24	2.57	173.30	2区	2層	H2-10
S19	叩石	花崗岩	8.90	7.50	5.90	533.00	1区	表土	H2-9
S20	打欠石鏃	安山岩	6.87	4.42	1.38	61.50	トレンチ4	4・5層	S63-11

( )内は残存値

## 3 石器組成表(サヌカイト)

調査年度	出土位置		石鏝	石鏝未製品	スクレイパー	加工痕剥片	楔形石器	剥片	碎片	計	重量(g)
	トレンチ・地区	層位等									
昭和63年度	トレンチ2	2～4層	1					1		2	2.09
		5層	2					1	1	4	1.24
	トレンチ3	1層						1		1	4.18
		2層	2					3		5	12.02
	トレンチ4	3・4層						4		4	9.40
		3層	1					5		6	56.54
	トレンチ6	4・5層	3	1				25		29	148.56
		1層						1		1	1.93
	トレンチ7	2～4層						1		1	0.97
		2層						1		1	3.21
	トレンチ8	3・4層						1		1	2.07
		2層	1					1		2	13.14
	トレンチ9	3層						1		1	0.52
1層							1		1	0.45	
トレンチ10	2・3層	1					3		4	36.55	
	表採						2		2	1.49	
平成2年度	1区	表土	1					20		21	47.46
	2区	攪乱坑	1				1	30		32	69.25
		2層	3					39		42	82.81
	3区	攪乱坑			1			15		16	31.01
		1層						5		5	9.28
	5区	3～8層	1			1		21		23	301.78
表採							73		73	262.25	
貝塚付近表採							1		1	11.20	
	計		17	1	1	1	2	255	1	278	1109.40

## 4 石器組成表(その他の石材) (黒曜石には鯨島産が含まれる。)

調査年度	出土位置		黒曜石		玉髄		流紋岩		その他			
	トレンチ等	掲載層位	剥片	重量(g)	剥片	重量(g)	石核	剥片	重量(g)	安山岩製石斧	安山岩製石鏝	花崗岩製印石
昭和63年度	トレンチ4	4・5層									1	
	トレンチ7	2層						1	8.98			
	トレンチ9	3層						1	2.04			
	表採		1	1.63								
平成2年度	1区	表土					1	7	542.41			1
	2区	攪乱坑						1	1.20			
		2層	1	0.30	1	0.90					1	
	3区	攪乱坑	1	1.01								
	5区	3・4層						3	32.18			
表採							1	0.87				
	計		3	2.94	1	0.90	1	14	587.68	1	1	1

## 付 編

# 塩生遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定) および炭素・窒素安定同位体分析

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

塩生遺跡は、岡山県倉敷市児島塩生字濱1919外に所在する。測定対象試料は、土壇墓から出土した人骨2点である(表1)。

### 2 年代測定試料の化学処理工程

- (1) 骨試料はコラーゲン抽出 (Collagen Extraction) を行う (表1に「CoEx」と記載する)。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土等の付着物を取り除く。試料をピーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。
- (2) 0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったピーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。コラーゲンを2つに分け、一方を年代測定用、他方を安定同位体等分析用の試料とする。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 3 年代測定試料の測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシェウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 4 炭素・窒素安定同位体比及び含有量測定試料の化学処理工程と測定方法

2 (1) ~ (2) の処理を行う。

- (3) 試料をEA (元素分析装置) で燃焼し、N<sub>2</sub>とCO<sub>2</sub>を分離・定量する(表3)。
- (4) 分離したN<sub>2</sub>とCO<sub>2</sub>を、インターフェースを通して質量分析計に導入し、炭素の安定同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )と窒素の安定同位体比( $\delta^{15}\text{N}$ )を測定する(表3)。



これらの処理、測定には、元素分析計-安定同位体比質量分析計システム(EA-IRMS: Thermo Fisher Scientific 社製 Flash EA1112- DELTA V ADVANTAGE ConFlo IV System)を使用する。

## 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である。 $\delta^{15}\text{N}$ は、試料窒素の $^{15}\text{N}$ 濃度( $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$ )を測定し、基準試料(大気中の窒素ガス)からのずれを示した値である。いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。 $\delta^{13}\text{C}$ はAMS装置と質量分析計で測定され、AMS装置による値は表中に(AMS)と注記し(表1)、質量分析計による値は表中に(MASS)と注記する(表3)。 $\delta^{15}\text{N}$ は質量分析計による値で、表中に(MASS)と注記する(表3)。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}\text{C}$ が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.3\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線(Reimer et al. 2020)を用い、OxCalv4.4較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

## 6 測定結果

試料の測定結果を表1～3に示す。

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、No.1が $780 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.2が $830 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は

No.1が1229～1273cal ADの間に2つの範囲、No.2が1213～1261cal ADの範囲で示される。

次に試料の安定同位体比について検討する。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料No.1が $-19.2\%$ 、試料No.2が $-18.7\%$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ は試料No.1が $11.3\%$ 、試料No.2が $12.0\%$ である。

これらの結果について、日本列島における食性分析の成果を参照して検討する。今回測定された試料の値を日本列島の生物に関するデータと比較し、横軸に $\delta^{13}\text{C}$ 、縦軸に $\delta^{15}\text{N}$ を取ったグラフ(Yoneda et al. 2004に基づいて作成、図2)に示した。

グラフによると、今回測定された試料の $\delta^{13}\text{C}$ はC3植物や陸生哺乳類から淡水魚の範囲に分布する。 $\delta^{15}\text{N}$ はC3植物や陸生哺乳類より高く、淡水魚や海生生物の範囲に位置する。これらのことから、試料となった人はC3植物、陸生哺乳類、淡水魚、海生生物等を食物としていた可能性がある。

なお、海生生物を食べていた可能性があるため、海洋リザーバー効果の影響によって本来よりも古い年代値が示されている可能性があることを考慮する必要がある。

試料の保存状態について検討すると、コラーゲン回収率(=コラーゲン量/処理した試料量)は試料1が5.8%、試料2が10%となっており、適正な値である。また、炭素含有量、窒素含有量が適正な値である(van Klinken 1999)。C/N比は、現生動物骨と同程度と見なされる値となっている。(DeNiro 1985, Hare and von Endt 1990)。以上のことから、今回の測定結果は試料となった骨コラーゲンの本来の特徴をおおむね問題なく示していると判断される。

## 文献

- 赤澤威、米田穰、吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析、中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内— 北村遺跡 本文編(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14、長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター、445-468
- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- DeNiro, M.J. 1985 Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction, *Nature*, 317, 806-809
- Hare, P. E. and von Endt, D. 1990 Variable preservation of organic matter in fossil bone, Annual Report of Director of the Geophysical Laboratory, Carnegie Institution, Washington, 1989-1990, Geophysical Laboratory, Washington D.C., 115-118
- Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62 (4), 725-757
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363
- van Klinken, G.J. 1999 Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements, *Journal of Archaeological Science*, 26, 687-695
- Yoneda, M. et al. 2004 Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan, *Journal of Archaeological Science*, 31, 97-107

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-220372	No.1	土壌層 1	人骨	CoEx	-20.03 ± 0.18	780 ± 20	90.72 ± 0.24
IAAA-220373	No.2	土壌層 2	人骨	CoEx	-19.58 ± 0.19	830 ± 20	90.18 ± 0.25

[IAA 登録番号: #B423]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-220372	700 ± 20	91.65 ± 0.24	782 ± 21	1229calAD - 1245calAD (31.2%) 1256calAD - 1273calAD (37.0%)	1225calAD - 1275calAD (95.4%)
IAAA-220373	740 ± 20	91.19 ± 0.25	830 ± 22	1213calAD - 1261calAD (68.3%)	1175calAD - 1267calAD (95.4%)

[参考値]

表3 炭素・窒素安定同位体比及び含有量

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (MASS)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰) (MASS)	C 含有量 (%)	N 含有量 (%)	C/N 重量比	C/N モル比
No.1	-19.2	11.3	41.5	14.5	2.9	3.3
No.2	-18.7	12.0	41.1	14.7	2.8	3.3

なお、表3に結果を示した炭素と窒素の安定同位体比および含有量の測定は、昭光サイエンス株式会社の協力を得て行った。

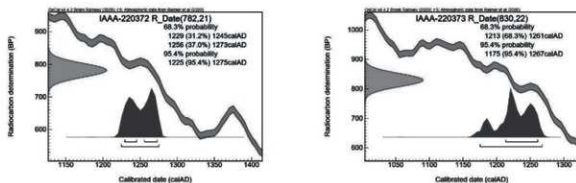


図1 暦年較正年代グラフ (参考)

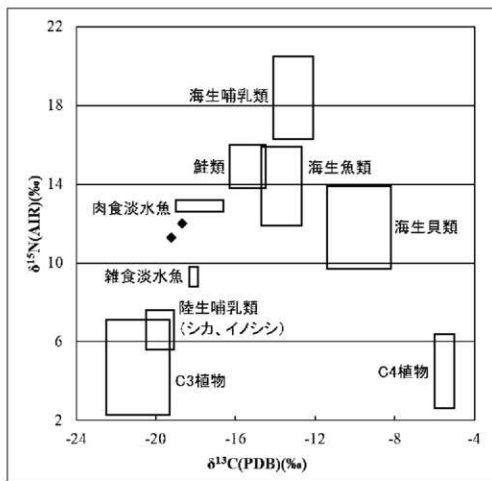


図2 炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)

◆は測定試料。散布図上に表示した枠は、食料資源の同位体比の分布範囲を示す。Yoneda et al. 2004に基づき作成した。



## 图 版



1 トレンチ1北壁断面



2 トレンチ2  
土坑1検出状況



3 トレンチ3東壁断面





図版2 塩生遺跡 平成5年度(2)



1 トレンチ4  
土坑2断面



2 トレンチ4  
土坑2検出状況



3 トレンチ4 土坑2  
鉄釘出土状況  
(中央)

1 トレンチ5南壁断面



2 トレンチ6  
炉状遺構1検出状況



3 トレンチ7  
炉状遺構2検出状況



図版4 塩生遺跡 令和2年度(1)



1 1区全景  
(南西から)



2 1区北壁断面西半



3 1区東壁断面

1 1区  
炉状遺構3検出状況



2 1区 土坑3半裁状況  
(南西から)



3 1区 土壙墓1  
(南から)



図版6 塩生遺跡 令和2年度(3)



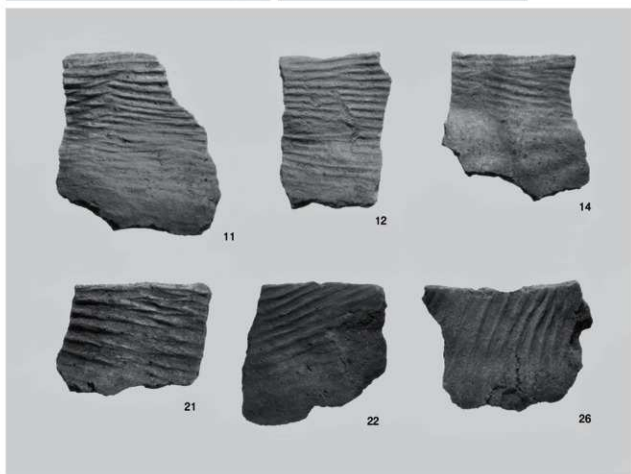
1 1区 土坑墓2  
(北西から)

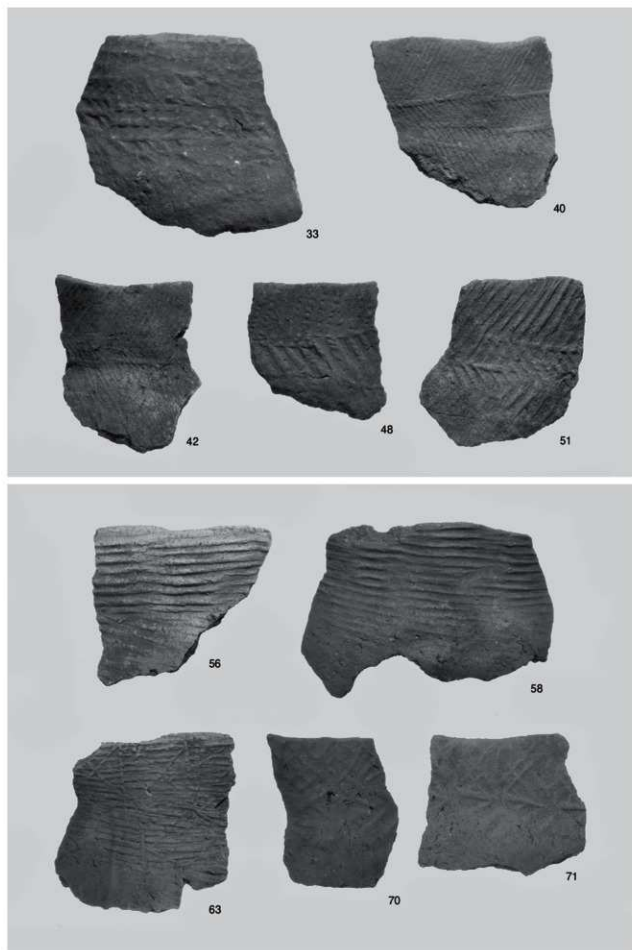


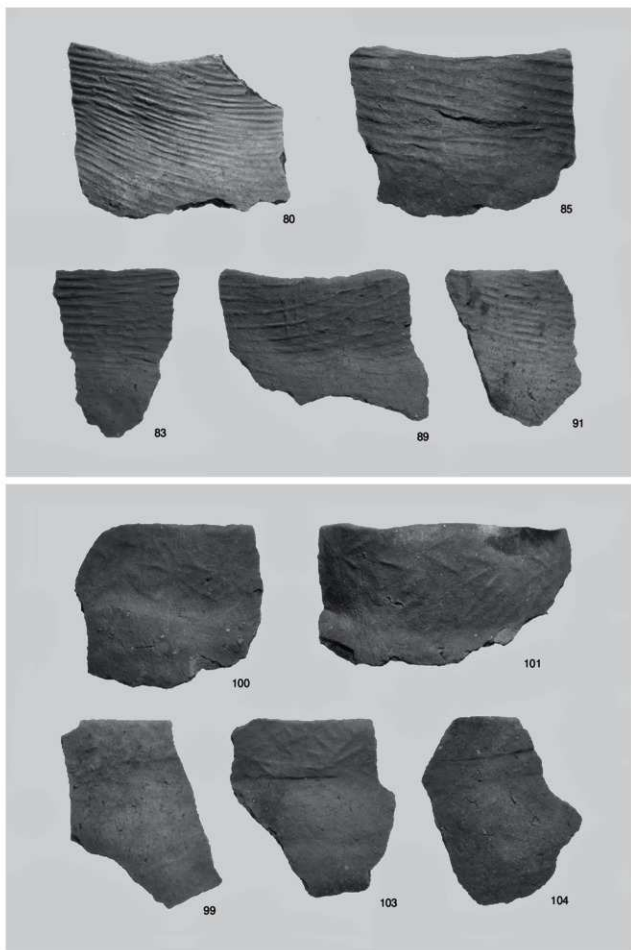
2 2区全景  
(南西から)



3 2区西壁断面

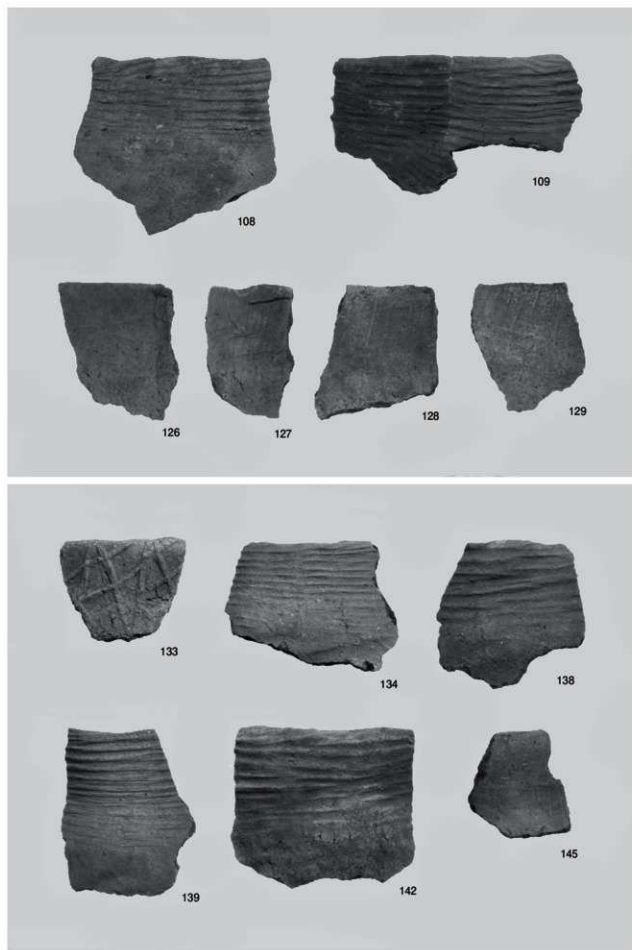


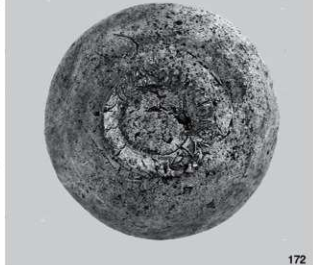




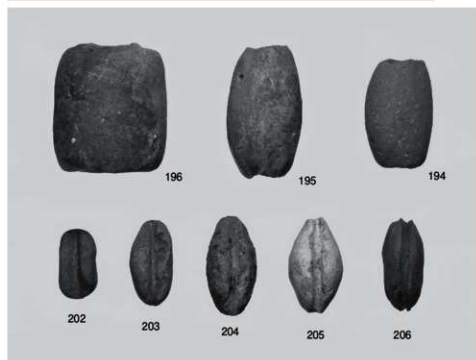
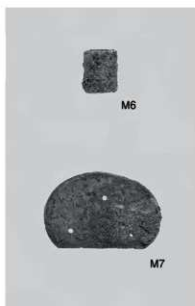
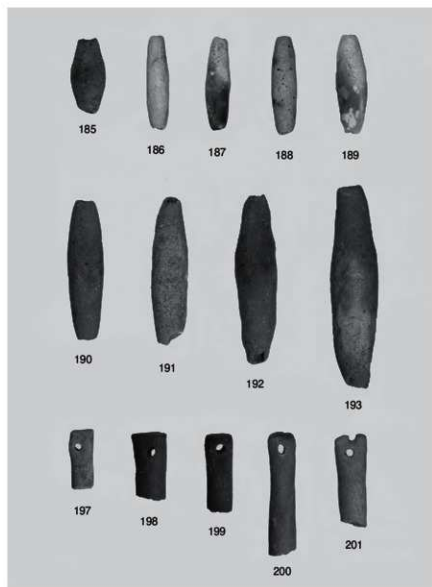


図版 10 塩生遺跡 出土遺物 (4)





図版 12 塩生遺跡 出土遺物 (6)





1 トレンチ2北壁断面



2 トレンチ3北壁断面



3 トレンチ4北壁断面



4 トレンチ4遺物出土状況



5 トレンチ7北壁断面



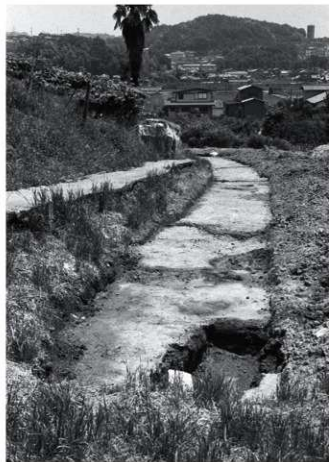
6 トレンチ8北壁断面



7 トレンチ10北壁断面



8 トレンチ11北壁断面



1 1区全景(西から)



2 2区全景(南から)



3 3区西側



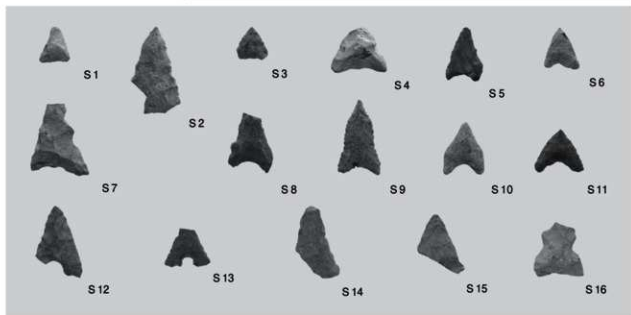
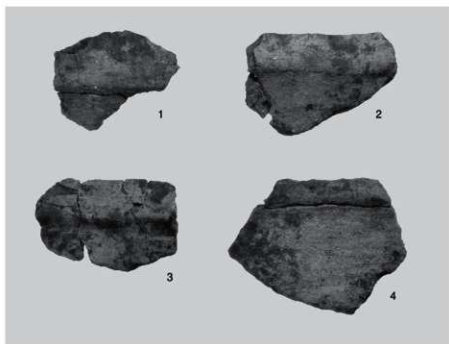
4 3区東側



5 4区全景(西から)



6 5区西壁断面





## 報告書抄録

ふりがな	しょうなすいせき にしもとほまかへつか							
書名	塩生遺跡 西元浜貝塚							
副書名								
巻次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	小野雅明・藤原好二・(株)加速器分析研究所							
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター							
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 ℡086-454-0600							
発行年月日	令和5年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうなすいせき 塩生遺跡	おかやまけんくらしまし 岡山県倉敷市 こごましおらす 児島塩生	33202	27-020	34° 28' 35"	133° 46' 17"	19930622 ~ 19930721  19940120  20200804 ~ 20200825	42㎡  6㎡  70㎡	賃貸マンション建設工事   工場建設工事
にしもとほまかへつか 西元浜貝塚	おかやまけんくらしまし 岡山県倉敷市 たままほくろさき 玉島黒崎	33202	15-001	34° 32' 04"	133° 38' 22"	19881128 ~ 19881210  19900601 ~ 19900622	44㎡  146㎡	分譲住宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
塩生遺跡	散布地	縄文～中世	採鹹土坑3・炉 状遺構3・土壇 墓2	製塩土器・須恵器・ 土師器・中世土器・ 土錘・丸軋・人骨		中世の製塩遺構及び 埋葬を検出。		
西元浜貝塚	貝塚	縄文		縄文土器・石器		遺跡の範囲を確認。		



#### 印刷仕様

紙 質	表紙：サンマット160kg (PP張り) 本文：書籍用紙65kg 図版：マットアート110kg
編 集	Mac OS 10.14.6 Adobe InDesign CC 14.0.2 Adobe Photoshop CC 20.0.4
使用フォント	モリサワOpenType フォント (リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・ 太ゴ B101・見出ゴ MB31) ヒラギノ明朝 Pro W3
製 本	無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第19集

### 塩生遺跡 西元浜貝塚

令和5年3月31日印刷発行

発 行 倉敷市教育委員会

編 集 倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 倉敷市福田町古新田940番地

TEL086-454-0600

The Excavation Report  
Of  
Syonasu Site Nisimotohama Shell Mound

---

Volume 19

Kurashiki  
Archaeological Center

---

March 2023